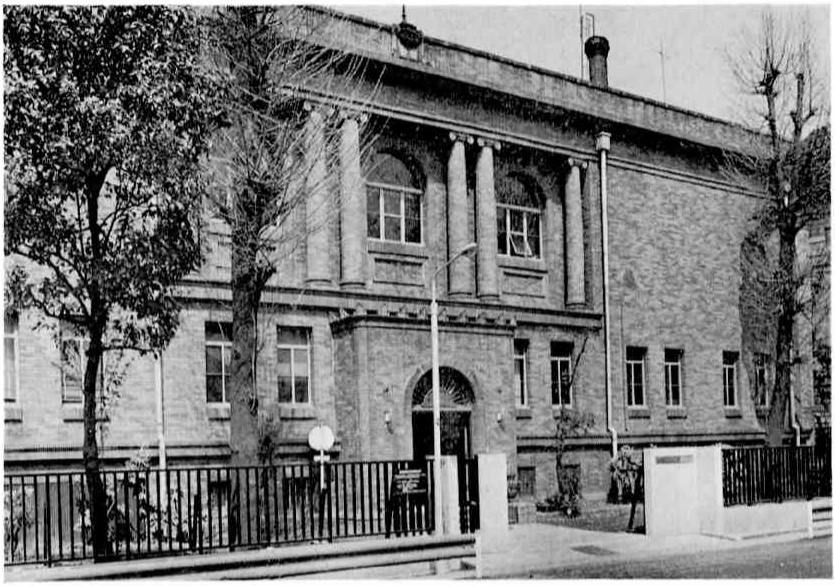
東京国立文化財研究所要覧

1981

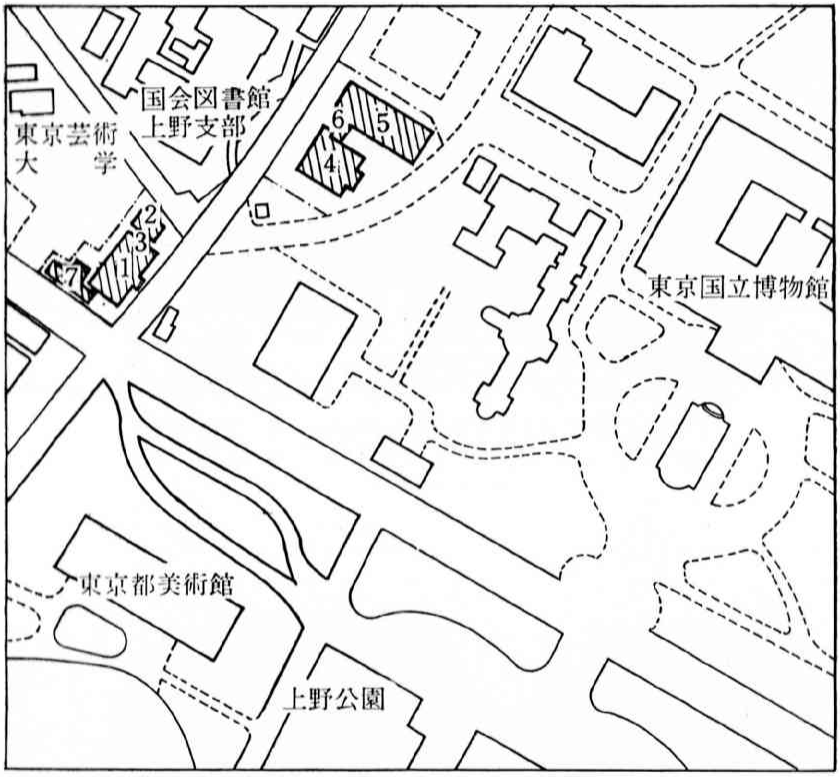
昭和56年度



東京国立文化財研究所本館・情報資料部研究棟

東京国立文化財研究所保存科学部実験室・別館

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 本館（美術部）
2. 書庫
3. 渡廊下
4. 保存科学部実験室（庶務課・保存科学部）
5. 別館（芸能部・保存科学部・修復技術部）
6. 渡廊下
7. 情報資料部研究棟

はじめに

昭和56年度の研究活動をふりかえってみた場合，とくに印象深かったのは，何といっても，文部省科学研究費「特定研究」の「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」がその第2年度に入り，研究が一段と活発化したことである。この特定研究は，学術研究の発展の必要性が大きい分野について，集中的に研究の推進をはかるのを目的とする大型プロジェクトであって，文化財関係がとりあげられたこと自体たいへん喜ばしいが，特に当研究所は奈良国立文化財研究所とならんで，東西の研究拠点となった感があり，多くの研究者がこれに参加したことは，特に喜ばしい。研究はさらにもう1年つづく予定であるが，これを機会に文化財に関する学問が益々発展することを期待したい。

次に研究交流についていえば，本年度の国際研究集会が「東アジアにおける美術交流」をテーマとして行われたことは意義深い。文化財の保存に関するシンポジウムに美術交流をとりあげたのは不審であるとの意見も聞かれたが，日本語の「保存」には，文化財としての価値の評価およびそれにともなう行政措置としての指定が含まれていることは，文化財保護事業史に徴しても明らかな所であり，私もまた長年その方面にたずさわってきた者である。したがって価値評価が保存の一部であるということは私の信念となっている。今回は私の考えにそってこの国際研究集会のテーマを定めたのである。そのことをここに記して将来の参考としておきたい。

東京国立文化財研究所長

伊　藤　延　男

目　次

Ⅰ　沿　　革 …… 1

1　設立の経緯 …… 1

2　年　　表 …… 1

3　歴代所長 …… 5

Ⅱ　機構と職員 …… 6

1　機　　構 …… 6

2　職　　員 …… 7

Ⅲ　調査研究 …… 10

1　所　　長 …… 10

2　美　術　部 …… 10

(1)　概　　要 …… 10

(2)　研究調査活動 …… 12

A　一般研究 …… 12

B　特別研究 …… 16

C　科学研究費 …… 16

3　芸　能　部 …… 18

(1)　概　　要 …… 18

(2)　研究調査活動 …… 19

A　一般研究 …… 19

B　特別研究 …… 21

4　保存科学部 …… 21

(1)　概　　要 …… 21

(2)　研究調査活動 …… 23

A　一般研究 …… 23

B 特別研究 …… 28
C 受託研究 …… 29
D 科学研究費 …… 30
5 修復技術部 …… 31
(1) 概　　要 …… 31
(2) 研究調査活動 …… 32
A 一般研究 …… 32
B 特別研究 …… 35
C 受託研究 …… 36
D 科学研究費 …… 37
6 情報資料部 …… 38
(1) 概　　要 …… 38
(2) 研究調査活動 …… 39
A 一般研究 …… 39
B 科学研究費 …… 40
7 主要研究業績 …… 41
8 その他の研究活動 …… 54

Ⅳ 事　　業 …… 56
1 出　　版 …… 56
(1) 美術研究 …… 56
(2) 日本美術年鑑 …… 56
(3) 芸能の科学 …… 57
(4) 保存科学 …… 57
2 黒田清輝巡回展 …… 58
3 公開学術講座 …… 58
4 会　　議 …… 59
5 国際・国内交流 …… 63

V　研究施設・設備 …… 68
1　蔵　　書 …… 68
2　出　版　物 …… 69
3　資　　料 …… 72
4　機　器・設　備 …… 73
5　黒田記念室 …… 79
6　閲　覧　室 …… 80

I 沿　革

1　設立の経緯

本研究所は，昭和27年４月１日発足したのであるが，その前身であり母体となったものは，昭和５年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は，大正13年７月，故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は，故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し，また我が国美術上の必要に照らして次の事業を行うこととした。

(1)　美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。

(2)　黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。

(3)　前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。

(4)　事業成立のうえは一切これを政府に寄附すること。

2　年　　表

昭和元年12月　前記の事業を遂行するため委員会が設置され，東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し，美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄，黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清，建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎，会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和２年２月　美術研究所準備事業を開始した。

同　　年10月　東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造，半地階２階建，延面積1,192 m² の建物１棟を起工した（本館）。

同　３年９月　前記の建物が竣工したので，美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し，また館内に黒田子爵記念室を設け，同子爵の作品

沿　　革

を陳列した。

同　4年5月　遺言執行人代表者樺山愛輔は，建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日　勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ，東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同　年10月17日　美術研究所開所式を挙行した。

同　7年1月　美術研究所の研究成果発表機関誌として，定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同　年4月18日　株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円，合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同　年5月26日　帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け，美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同9年10月18日　毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日　鉄筋コンクリート造，2階建，延面積129m² の書庫が竣工した。

同　年4月　「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同　年6月1日　勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し，閲覧事務を開始した。

同12年6月24日　勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され，従来，帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同　年11月29日　美術研究所長職務規程，美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日　木造，平屋建，延面積97m² の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日　黒田清輝の作品，並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日　美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同　年7～8月　酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため，さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年３月29日　酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同　年４月４日　酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同　年４月16日　東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年５月１日　美術研究所官制が廃止され，国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。これが保存科学部の前身である。昭和23年度より専任の職員を配置し，研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66m²）に設けた。

同　24年４月　本年か度ら科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年８月29日　文化財保護法の制定に伴い，美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

昭25年９月15日　文化財保護委員会事務局設置にともない，保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

同26年１月31日　美術研究所組織規程(昭和26年文化財保護委員会規則第５号)が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。(昭和25年８月29日から適用)

同27年４月１日　東京文化財研究所組織規程(昭和27年文化財保護委員会規則第7号)が定められ，美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ，美術研究所組織規程が廃止された。

また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同　年７月１日　芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室２室を同大学から借用し，研究を開始した。

同28年４月26日　保存科学部研究室として，東京国立博物館構内の倉庫132m²を改造のうえ，移転した。

同29年７月１日　東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第１号），東京国立文化財研究所となった。

沿　　革

同32年３月22日　東京国立博物館構内に木造，外部鉄網モルタル塗，平家建，８m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同　年11月30日　従来の２階建書庫のうえに更に１階を増築３階建とし，増築分延面積71m²が竣工した。

同34年４月30日　国立文化財研究所研究受託規程(文化財保護委員会告示第14号)が定められ，この年度から受託研究が開始された。

同36年９月16日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第１号），従来の庶務室は庶務課となった。

同37年３月31日　東京国立博物館構内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として，鉄筋コンクリート造２階建延面積663m²の建物１棟が竣工した。

同　年７月１日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第１号），新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同　年７月20日　芸能部研究室は，保存科学部庁舎の竣工に伴い，旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年６月15日　文部省設置法の一部が改正され(昭和43年法律第99号)，本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年８月23日　保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m²)の起工式が行われた。

同45年３月25日　前記の別館が竣工したので，同年５月26日竣工式が行われた。

同45年４月22日　芸能部は，別館３階に移転した。

同45年５月８日　保存科学部は，別館の地階～２階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年６月29日　保存科学部庁舎の１階の模様替工事に着手し，同年10月15日工事が終了した。

同　年11月２日　所長及び庶務課は，本館から保存科学部庁舎の１階に移転した。（本館は，美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27」号に変更された。

同46年４月１日　保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m²を東京国立博物館から所管換された。

52 正

沿　　革

同48年４月12日　文部省設置法施行規則の一部が改正され(昭和48年文部省令第６号)新たに修復技術部が設けられ４部１課となり，修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ，保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年４月18日　文部省設置法施行規則の一部が改正され(昭和42年文部省令第10号)情報資料部の新設により５部１課となり，情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ，美術部資料室は廃止された。

同53年３月20日　本館構内の写場等（木造平家建延面積144m²)を取りこわし，情報資料部研究棟として，鉄筋コンクリート造，地下１階，地上３階，延面積565.95m²の建物が竣工した。

3　歴代所長（昭和５年～昭和56年）

主事	正木直彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主事	矢代幸雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和田英作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所長	矢代幸雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田中豊蔵	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所長	田中豊蔵	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所長代理	福山敏男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所長	松本栄一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢代幸雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所長	田中一松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所長	関野克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所長	伊藤延男	(昭和53. 4. 1～現在)

Ⅱ　機構と職員

東京国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1　機　　構

- 所長
  - 庶務課
    - 課長
      - 課長補佐
        - 庶務係
        - 会計係

（庶　務　課）
職員の人事に関する事務・職員の福利厚生に関する事務・公文書類の接受・公印の管守及び庶務に関すること，経費及び収入の予算・決算その他会計に関する事務・行政財産及び物品の管理に関する事務・庁内の取締り

  - 美術部
    - 部長
      - 第一研究室
      - 第二研究室
      - 主任研究官

（美　術　部）
わが国の美術及び西洋美術・東洋美術に関する調査研究及びその結果の公表・黒田記念室に関する事務

  - 芸能部
    - 部長
      - 演劇研究室
      - 音楽舞踊研究室
      - 民俗芸能研究室
      - 主任研究官

（芸　能　部）
演劇・音楽・舞踊・民俗芸能及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表

  - 保存科学部
    - 部長
      - 化学研究室
      - 物理研究室
      - 生物研究室
      - 主任研究官

（保存科学部）
文化財及びその保存に関する化学的・物理学的・生物学的調査研究並びにその結果の公表

  - 修復技術部
    - 部長
      - 第一修復技術研究室
      - 第二修復技術研究室
      - 第三修復技術研究室

（修復技術部）
文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表

  - 情報資料部
    - 部長
      - 文献資料研究室
      - 写真資料研究室
      - 主任研究官

（情報資料部）
文化財の研究に関する資料の作成・収集・整理・保管・公表・閲覧及び調査研究

2 職　　員

(昭和57年3月30日現在)

所　　属	職　　名	氏　　名	
所　　長	所　　長	伊藤延男	(日本建築史)
庶務課	課　　長	守谷安知	
	課長補佐	西山　博	
庶務係	係　　長	能村浩次	
	係　　員	松本多賀子	
	事務補佐員	中村節子	
	〃	宮崎真澄	
	〃	小木喜代子	
	技能補佐員	松良佳美	
	調査員(非)	竹中弥生	
会計係	係　　長	斉藤　朗	
	主　　任	花岡忠義	
	事務補佐員	吉川久美子	
	〃	鎌田祥子	
	技能補佐員	高成一雄	
	業務補佐員	松田ッキ	
美術部	部　　長	川上　涇	(中国絵画史)
第一研究室	室　　長	宮　次男	(日本中世絵画史)
	主任研究官	田村悦子	(和漢書道史)
	〃	柳沢　孝	(仏教絵画史)
	〃	猪川和子	(日本彫刻史)
	〃	田実栄子	(染織工芸史)
	研究員	増田勝彦	(装演技術)
	事務補佐員(非)	高橋邦枝	(資料整理・編集補佐)
第二研究室	室　　長	関　千代	(日本近代絵画史)
	主任研究官	陰里鉄郎	(日本近世・近代絵画史)
	研究員	三輪英夫	(日本近世・近代絵画史)
	事務補佐員(非)	大西純子	(資料整理・編集補佐)
芸能部	部　　長	三隅治雄	(民俗芸能)
劇演研究室	室　　長	佐藤道子	(寺院芸能)
	調査研究員(非)	松本　雍	(中世芸能)
音楽舞踊研究室	室　　長	蒲生郷昭	(音楽学)
	研究員(併)	横道萬里雄	(中世芸能)

所属	職名	氏名	
	調査研究員(非)	加納マリ	(民族音楽学)
民俗芸能研究室	室長	羽田昶	(日本演劇)
	研究員	中村茂子	(民俗芸能)
	調査研究員(非)	仲井幸二郎	(芸能史)
	事務補佐員(非)	太田有喜子	(資料整理)
保存科学部	部長	江本義理	(分析化学)
化学研究室	室長	馬渕久夫	(同位体化学)
	主任研究官	門倉武夫	(大気汚染)
物理研究室	室長	見城敏子	(塗料化学)
	主任研究官	石川陸郎	(照明・ラジオグラフィー)
	研究員	三浦定俊	(微気象)
	技術補佐員(非)	富沢威	(分析化学)
生物研究室	室長	新井英夫	(微生物学)
	調査研究員(非)	森八郎	(応用昆虫学)
修復技術部	部長	鈴木友也	(美術史学)
第一修復技術研究室	室長	中里寿克	(漆芸技術)
	専門職員	茂木曙	(彩色保存技術)
	研究員	西浦忠輝	(木材材質改良学)
第二修復技術研究室	室長	鶴田武良	(中国絵画史)
第三修復技術研究室	室長	樋口清治	(高分子化学)
	研究員	青木繁夫	(考古学)
	技術補佐員(非)	三浦正人	(考古遺物保存技術)
情報資料部	部長	久野健	(東洋彫刻史)
文献資料研究室	室長	上野アキ	(東洋古代絵画史)
	主任研究官	江上綏	(日本古代絵画史・文様史)
	研究員	米倉迪夫	(日本中世絵画史)
	事務補佐員(非)	竹之内玲子	(図書・文献資料整理)
	〃	保坂とき子	(〃)
写真資料研究室	室長	関口正之	(日本仏教絵画史)
	研究員	鈴木廣之	(日本近世絵画史)
	専門職員	橋本弘次	(美術写真)
	〃	市川和正	(〃)
	〃	野久保昌良	(〃)
	事務補佐員(非)	田中与子	(写真資料整理)
	〃	塩川葉子	(〃)

昭和56年度における転退職者

庶務課	係長	出口小太郎	53. 4. 1～56. 4. 1	文化庁へ転出
〃	技能補佐員	平林喜多江	53. 12. 25～56. 12. 29	退職
〃	〃	松良佳美	57. 2. 8～57. 3. 31	退職
〃	事務補佐員	吉川久美子	55. 4. 1～57. 3. 31	退職
芸能部	室長	柿木吾郎	49. 4. 1～56. 4. 1	上越教育大学へ転出
修復技術部	部長	田辺三郎助	53. 4. 1～56. 4. 14	国立歴史民俗博物館へ転出
〃	技術補佐員	三浦正人	54. 4. 1～57. 4. 30	退職

Ⅲ 調査研究

1 所　長

(1) 日本建築史の研究

従来よりの継続として行ってきているもので，本年度は引続き平安時代に重点を置いた。

(2) 日本建築構造技法の研究

科学研究費　特定研究「古文化財」の第2期の第2年度として，「建造物・美術工芸品の劣化現象と保存修復に関する研究」の総括を行うとともに，その一部である「文化財建造物の構造力学的研究」研究班の総括責任者ともなった。研究班は，伊藤のほか東京大学教授杉山英男氏，同助手安藤直人氏，東文研西浦忠輝氏で編成し，文化庁建造物課主任文化財調査官，工藤圭章氏，同伊原恵司氏，奈文研平城部長岡田英男氏，同建造物室長吉田靖氏にも協力を願っている。

本年度は，各種民家軸組モデルの耐力測定を行った。

(3) 文化財保護制度史研究

従来よりの継続として史料整理を行った。

(4) 木材年輪年代学の基礎研究

主として既往に発表されたデータを解析し，特に木曽産ヒノキについて詳しく考察した。その結果1材においては4方向の測定値に相当の関連性があることが判明した。

2 美 術 部

(1) 概　　要

美術部は日本・東洋の古美術，日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行っている。美術部は現在2室に分かれ，古美術関係は第一研究室，近代・現代・西洋美術は第二研究室が担当する。

調査研究は，美術部所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められている

が，学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し，方法においても成果においても，基礎的・先駆的役割を果して，広く学界に寄与すべく努めている。そのため重要なる問題に関しては共同研究を行い，また当部独自の光学的研究法を活用し，すでに多くの成果を収めた。昭和53年度より４カ年計画で情報資料部と共同の特別研究「落款・印章・賛文・銘記の研究」を行い，これに関する資料収集を推進している。文部省科学研究費補助金による共同研究としては，「近世日本における画巻の研究」（一般研究Ｂ・代表者関千代）がある。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」(昭和７年創刊）に発表し，大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行している。各研究員の研究課題と調査研究内容は(2)研究調査活動の項に示す通りである。またわが国美術界の全般にわたる動向を調査し，客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編纂発行している。

以上のほか，調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため，毎年１回公開学術講座を開催し，本年度は第５回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」を情報資料部と共同で担当した。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基づいて創立された美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は，黒田清輝の作品その他関係資料を保管し，毎週一回木曜日の午後，一般に公開している。

第一研究室

第一研究室の研究員は，日本及び東洋諸地域の古美術について，各々専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め，主要問題を捉えた共同研究を行い，常に精密な基礎資料の収集に努めている。

文部省科学研究費補助金による共同研究としては，「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」(特定研究・代表者柳沢孝）の一部を担当実施し，一般研究Ｂ(代表者関千代)に分担参加した。

第二研究室

明治以降の日本近代美術の調査研究，並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査を継続して行っている。近代美術に関連し，西欧美術並びに日本近世の洋風美術

調査研究

についても若干の研究を行っている。現代美術に関する調査研究は，集積した年度資料を整理し，その結果を「日本美術年鑑」として毎年公刊，本年度は昭和54年の内容をもった55年版を刊行，引き続き56年版の編集に着手した。

研究所事業として昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展が5月弘前市立博物館において開催された。

文部省科学研究費による研究として，「近代日本における画巻の研究」(一般研究B，代表者関千代）を行い，特別研究「落款・印章・賛文・銘記の研究」に参加，近代関係資料の収集につとめた。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 日本彫刻史の研究

(1) 日本古代彫刻東洋彫刻の研究

日本古代彫刻の源流をなす東洋諸彫刻の調査を，各博物館所在の像を中心に行った。

(2) 平安・鎌倉時代彫刻の研究

飛鳥資料館出陳の橿原地方の彫刻の調査，京都国立博物館における禅宗彫刻の調査，和歌山県立博物館出陳彫刻の調査および，京都，静岡，三重，石川県の神像彫刻の調査を行った。

(3) 尊像別分類による彫刻の研究

日本全国に所在する，奈良時代より江戸時代に及ぶ三十余例の涅槃彫刻の総まとめを行い，インド，中国の実査の諸作例を加え，さらに未調査であった東京，埼玉，茨城県下の諸像の調査撮影を終了，美術研究に発表した。また，他の釈迦像の調査を引続き行なっている。(猪川)

2. 日本古代中世絵画史の研究

(1) 仏教絵画史の研究

前年度に引続き奈良時代より鎌倉時代にわたる各種遺品について，光学的方法による詳細な調査を実施し，かつ資料の収集整備につとめ，また下記の主題に関する調査研究を行った。(柳澤)

a）織成当麻曼陀羅に関しては従来の研究を検討すると共に敦煌壁画の観経変相と比較考察を試みるなど，本曼陀羅の成立に関する従来の日本説を否定し，唐からの請来品であることを強調した。

b）東寺西院曼荼羅について，既存の諸資料の検討と曼荼羅の再調査を行い，様式的特色とその由来に関して成果を発表した。

c）東寺蔵竜猛，竜智，不空像，泉涌寺蔵元照，道宣，俊仍像などを調査し，大陸肖像画と日本のそれとの関連を考察した。

d）別項記載の特定研究1「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」を主宰すると共に同研究絵画班の一員として，赤外線テレビカメラによる法界寺阿弥陀堂柱絵並びに鳳凰堂側壁阿弥陀来迎図などを調査し，成果をあげた。

(2) 絵巻・経絵の研究

絵巻調査は，新出の西行物語絵4巻について，写真撮影及び詞書翻字を行い，それにもとずいて内容検討など基礎調査を行った。またお伽草子系の大江山絵巻（曼殊院本），ねずみ草紙（サントリー美術館本）の調査を行った。経絵では，国際研究集会発表に関連して，室町時代わが国で開板された臨川寺版の法華経8巻見返絵を，奈良龍門文庫本及び唐招提寺本について調査し，さらに根津美術館蔵の高麗経法華経7巻の調査を行った。（宮）

3. 近世絵画史の研究

1）江戸洋風画の研究　小田野直武，佐竹曙山をはじめ，江戸後期洋風画家による花鳥画を中心に調査を行った。（陰里，三輪）

4. 近代日本美術史の研究

1) 明治以降の作家と団体及び美術批評についての調査研究を行った。作家としては洋画の国沢新九郎，曽山幸彦，石井柏亭，日本画の前田青邨，中村貞以，彫刻の中原悌二郎等の調査を行い，これらの一部を発表した。

2) 近代作家による画巻の調査研究を行った。

3) 明治丸遺存の壁画(板)について調査研究を行った。

4) 本研究所蔵の黒田清輝筆素描，写生帖を調査研究し，その成果として「黒田清輝素描集」を刊行した。（関，陰里，三輪）

5. 和漢書道史の研究

調査研究

(1) 仏教書道史の研究

仏教諸宗の開立者(祖師)は，おおむね独歩強烈な性格の持主であったからその書芸も特異であり，そしてその門弟流派のものこれに倣うことも少なくなく，宗教のみならず書道においても一派をなしたものである。これは部門別書道史の一部門として今後研究が進められなければならない。その意味で真宗の祖親鸞の書を解析し，その結果として彼の書の編年，特に自筆国宝東本願寺所蔵坂東『本教行信証』の成立改訂の段階を明瞭にすることができた。(田村)

(2) 文芸と書道との干渉の研究

口誦文芸が文字による文芸にうつると口誦時代の形態の他に紙面上の，目で見る形式が加わり，文字が芸術的にすなわち書芸として書かれると一段と目でみる形式が強く関係するようになった。

口誦文芸以来日本の文学には歌謡がとりこまれていることが著しい特色であるが，文字文芸の時期に入ってそれ一散文中における和歌の書式一はさまざま複雑なる様相を呈した。これを整理して諸形式をわかち，その相互の展開や意義を考究した。(田村)

(3) 漆紙文書の研究

近年，大規模土木工事に伴なう遺蹟の発掘少なからず，その発見品のなかには，有機質の材料に文字を墨書したものも奇蹟的に出土するに至った。その一つが木簡であるが，いま一つ，漆に漬けられたため硬化して土中に残存した文書類があり，「漆紙文書」といわれるようになった。

常陸国国府に関係あるべき茨城県石岡市鹿の子遺蹟からも漆紙文書が若干出土した。本所保存科学部の開発した撮影法によって，それらの文字が浮かび出ることとなり，その釈読ならびに研究を同部から委嘱せられて事にあたった結果，田制史上注目すべき私田の田籍，遺品がほかに存せぬ大衍暦もしくは五紀暦にもとずく具注暦，他国の風土記に比べて常陸国の風土記が漢文学的修辞にすぐれている事実と平行するかと思われる漢籍断片の遺存等を明らかにした。(田村)

6. 工芸史の研究

現在は陶磁・漆工・金工の研究員は不在で，染織専門の主任研究官田実栄子が必要に応じこれらの調査に当っているが，主なる研究題目及び調査活動は下記の通りである。

(1) 近世初期染織品の研究

(2) 小袖の研究

(3) 伝統的染織技術の調査・研究

(4) 上代裂の研究

研究題目の中，特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては，和歌山市の紀州東照宮伝来染織品の調査，米沢市の上杉神社蔵上杉謙信所用袴類の調査，宮城県白石市の片倉家伝来陣羽織の調査・研究が昭和55年度に引続く研究として進めたもので，今年度は更に日光山輪王輪王寺伝来の舞楽装束の調査・研究を加えた。片倉家伝来黒繻子小袖の修復技術部との共同研究（修復技術上の）を続行し，また前年（昭和55年）度秋に修復着手の片倉家伝来小紋胴服（重文）は，高田義男氏・山辺知行氏・共立女子大被服研究室との共同検討を行いながら予定通り昭和56年10月末に修復を完了した。また輪王寺の舞楽装束と共に伝来した胴着三領の調査・研究並びに修復の検討を今年度から始めた。修復の完了した片倉家伝来小紋胴服と今年度から調査・研究・修復検討を開始した日光山輪王寺伝来胴着三領を昭和56年度第２回染織品保存科学サロンで実物を展示し発表した（昭和57年２月９日）。

「伝統的染織技術の調査・研究」では，能登上布（苧麻），富山県福光の麻織物(大麻)，金沢の加賀友禅の現地調査を行った。また日本工芸会で昭和53年度から４カ年計画で行っている東博蔵「白地風景模様茶屋染帷子」の復元メンバーになり調査研究記録を担当し４年目である。

「上代裂の研究」はこの年が２年目の東博特定研究の分担者として，法隆寺裂・正倉院裂の基礎調査を続行している。

また科学研究費一般研究Ａ（代表者・関千代）「近代日本における画巻の研究」に，風俗・服装関係を受持って調査・研究を続行している。

なお第17回全国東照宮総会（昭和56年６月３日）において，徳川家康並びに頼宣所用服飾類調査・研究の業績に対して表彰を受けた。(田実)

7. 中国絵画史の研究

(1) 文部省在外研究員(長期)として，前年に引続きアメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレー校，ハーバード大学で近・現代中国絵画及び画人資料の調査収集を行い，合せてフォッグ美術館，フリーヤ美術館，トロポリタン美術館等収蔵中国絵画の調査を行った。(55年12月～56年９月)（鶴田）

調査研究

(2) 京都・水谷家，大阪・橋本家，神戸市立南蛮美術館収蔵来舶画人作品の調査を行った。(鶴田)

B 特別研究

「落款・印章・賛文・銘記の研究」

(研究代表者　美術部第一研究室長　宮　次男)

研究目的

本研究は，わが国の中世・近世・近代の絵画・書蹟・彫刻等のうち，落款・印章・賛文・銘記を有する作品を対象として，これらの資料を極力調査収集し，その基礎資料によって，作品の鑑別，真偽判定等を行い，作家研究を推進するものである。

実施要領

1. 中世以降近世までの彫刻作家約500人を選びだし，その作品及び関係銘記の資料を収集整理して研究を行う。
2. 東京国立文化財研究所が現在所蔵している近世画家等約450人の落款・印章の写真資料を基礎に調査研究をはかるとともに，重要作品及び主要画家等で資料の欠けているものの文献・写真資料の収集・調査を行う。
3. 近代美術の分野では，明治以降主要日本画家の印譜作成を行い，洋画家については主要作品のサイン写真の蒐集につとめ，その成果の一部を得た。
4. この研究は，美術部情報資料部の共同研究により遂行するものである。

C 科学研究費

「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」

(特定研究Ⅰ　研究代表者　柳澤　孝)

〔目的〕古代中世の美術作品，特に絵画，彫刻，染織品における材質，技法の研究に自然科学的方法を適用し，肉眼的観察のみでは不可能な精密かつ実証的な鑑識を行うことは，美術史的研究と古文化財保存の両面から極めて有効とされる。しかし従来の鑑識法では判定困難な点もあり，各分野ごとに技術的な開発改良を加え，鑑識の成果を総合的に向上させることにより，美術史的研究と古文化財保存に寄与しようとするものである。

絵画班(代表者柳沢，保存科学部三浦，情報資料部関口，ほか他機関３名)では，赤外線テレビによる鑑識法の強化を計るため，本年度は機材を補充すると共に現地調査用高所移動架台の開発と遠隔操作による赤外線テレビ撮影とを考案し，それらを用いて法界寺阿弥陀堂柱絵の尊像画64体のうちの半分と平等院鳳凰堂側壁の一部とを調査し，下描き線の検出や図様の鮮明などに多くの成果を収めた。

彫刻班(情報資料部久野，保存科学部石川，他機関３名)では①新羅仏の鋳造技法を鮮明するため遺品の調査と観察とにより，その復原的模像を鋳造することを目的とし，本年度は３種類の鋳型を完成し鋳造を試みる段階までに及んだ。②古彫刻に対するＸ線解析写真測量は古彫刻の内部構造をうかがう上で貴重な資料を提供するもので，本年度は撮影のための装置を開発試作し，基礎実験を行い，その精度の高いことを確認した。

染織班（共立女大柏木，ほか３名）においては①古代染織品の染料を同定するため新機材を開発購入し成果をあげ，②同じく古代染織品の復元的試作とそれらの耐光堅牢性及び変退色の機構の検討，③江戸時代の絹糸の劣化機構の考察，④古文書記載の青摺の染料である山藍の色素成分に関し，化学的な鮮明を継続中。

上記３班の本年度の成果は56年度特定研究「古文化財」年次報告書にそれぞれ収録されている。

「近代日本における画巻の研究」

分 担 課 題　　(一般研究(B)　代表　関千代)

(1)　明治期の作品調査（関）

(2)　明治末期・大正期の作品調査（陰里）

(3)　昭和前半期の作品調査（三輪）

(4)　画巻にみられる風俗・服飾等についての調査（田実）

(5)　中世・近世画巻との比較（宮）

本研究は，現在までその全容がほとんど未調査である近代日本の画巻を，総合的に調査し系統的に分類し基礎資料を作成するとともに，中世・近世期の画巻と比較検討し，近代画巻の表現的・様式的特質を究明して伝統様式の継承とその変容の歴史的展開を明らかにし，あわせて近代絵画における画巻の位置を解明することを目的とする

調査研究

ものである。

本年度は本研究の第二年度（最終年度）にあたり，前年度調査収集した資料の整理並びに検討，及び新たに横山大観筆「生々流転」，前田青邨筆「古事記」，小林巣居人筆「水辺図」，小松均筆「最上川」ほかを調査し，多数の写真資料をえた。

3 芸 能 部

(1) 概　　要

芸能部は，日本の伝統芸能に資するために必要な基礎的研究を行うことを目的とし，演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室より構成されている。芸能部の研究目標としては，諸芸能の理念・構造・技法及びその継承保存に関する研究などがあり，その研究に必要な資料の収集・整備及び記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また研究の結果は刊行・研究発表会・公開学術講座の開催などによって公表する。

本年度は，共同研究としては「狂言の技法の研究」「民俗芸能の民俗的基盤の研究」「民俗芸能伝承方法の研究」「民謡の研究」「話芸・寄席芸の研究」の課題に対して，研究員が何名かずつプロジェクトを組んで調査研究を行った。また昨年に引続き特別研究として「民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究」を実施した。

また，各研究員は個々に研究課題を選んで実証的な調査研究を行った。

以上各研究員による共同・各個の諸研究は，いずれも文化財行政に直接間接に寄与する基礎的な調査研究であると同時に，従来立ち遅れ気味のわが国の芸能研究を推進せしめ，日本芸能学の樹立に貢献する基盤となる研究である。また月例の研究会として，各研究室ごとに，外部研究者・芸能伝承者等の参加を得て「能楽技法研究会」「二月堂研究会」「長唄正本研究会」「民謡研究会」を行い，また56年７月には外部研究者・大学院生を対象とした連続研究発表会を「田楽芸の様式」のテーマで行った。また恒例の公開学術講座は「語りの技法」のテーマで56年12月に朝日ホールで開催した。

刊行物としては「芸能の科学」14―芸能論考Ⅶを刊行した。

演劇研究室

演劇研究室は，日本古典演劇について芸能学的・演劇学的に調査・研究を行い，またこれら諸芸能の周辺にあって，伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

本年度は，個人研究として「寺院行事の研究」「能の演出史の研究」を行い，共同研究として「狂言の技法の研究」を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について，芸能学的・音楽学的な調査・研究を行い，これら伝統芸能の成立に深い関係を持つ周辺分野についても調査研究を進めている。

本年度は，個人研究として「邦楽用語の研究」「日本の音楽家の研究」「三味線の研究」「長唄に関する文献の研究」などを行った。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承する民俗芸能を対象とし，それらの芸能の保存・活用に資するために必要な研究を行っている。本年度は，共同研究として「民俗芸能の民俗的基盤の研究」「民俗芸能伝承方法の研究」「民謡の研究」「話芸・寄席芸の研究」「狂言の技法の研究」を行い，個人研究として「田楽芸の研究」を行った。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し，各宗派にわたる総合的比較研究を行い，その変遷・分化をあとづけることを一貫した目的とする。本年度は岡山・滋賀・三重各県下に残存する「悔過会（けかえ）」の調査，高山寺所蔵の悔過会文書調査撮影，仁和寺・相国寺・永平寺・遊行寺等各宗派の主要行事の調査ならびに記録を行った。

また，昭和41年度以降継続的に実施している「東大寺修二会の調査研究」については，研究調査録の最終巻（第四冊）の執筆を行った。次年度に刊行を行う。（佐藤）

2. 能の演出史の研究

能の演出面の変化を，面・装束・型・囃子などの構成要素の変遷をたどることによって探ろうとするもので，本年は＜語り＞という小段をとりあげ，その成立過程や演出の変化を考察した。(松本)

3. 邦楽用語の研究

邦楽の用語は各分野ごとに区々な使われ方をしている。本研究は，それらを総合的に把握・整理して，同語異義，異語同義などの様相を明らかにし，新しい用語体系を確立することを目標とする。本年度は，その一部を達成した。(蒲生)

4. 日本の音楽家の研究

日本の音楽を支えてきた多くの音楽家たち（有名・無名）について，歴史的，社会的，経済的な面からの資料収集と分析研究を行った。(加納)

5. 三味線の研究

日本の音楽の中で，三味線音楽の占める割合は大きく，音楽の種類も多い。そして，三味線音楽の種類によって，用いられる三味線の種類も異なる。三味線音楽を特徴づける要因としての楽器の特性を，ジャンル別に調査研究した。(加納)

6. 長唄に関する文献の研究

長唄に関する研究文献のうち，明治以降書かれた著作についての研究を行った。(加納)

7. 民謡の研究

日本の民謡の研究において，民謡の芸謡的要素を無視してはその全き姿をとらえることができないという観点より，上代から近世に至る日本の民謡伝承の上に占める芸謡の位置を究明する目的をもって，前年度に引き続き近世歌謡の分析を行い，あわせて童唄の，特に遊戯唄の芸謡的要素についての調査研究を行った。(仲井・三隅・中村)

8. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を，その行われる季節・場所・参加者（演者・観客を含む）などの面から取りあげる連続した研究の一環として，「道中の芸能」に関する調査研究を行った。(三隅・仲井)

9. 民俗芸能伝承方法の研究

各種民俗芸能の伝承方法について資料の収集・分析を行った。(三隅・仲井)

10.　話芸・寄席芸の研究

落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究を安原コレクション邦楽レコードの整理を通じて続行中である。(三隅・仲井)

11.　狂言の技法の研究

狂言の「型」，とくに狂言小舞の動作単元を整理・分類する作業を続行し，流派間の異同・能の動作単元との比較等の調査を行い，まず和泉流における小舞の動作単元一覧を作成した。(羽田・松本)

12.　田楽芸の研究

田楽芸を機能的・形式的に細分類してみることによって，田楽芸の構造を明らかにするための調査研究を行った。(中村)

B　特別研究

「民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究」(4カ年計画の2年度)

民俗芸能の伝承を支える各地域の社会的条件を具体的に把握しながら，伝承条件の変化に対応する新たな伝承の仕方(継承者選定及び技法習得過程)について，各地域の関係者が具体的にどのように対処すべきかの方法論を引すための調査研究を行うべく，全国各地から伝承法のそれぞれに特徴をもつ地域を選んで調査を行った。昨年以来調査したものは風流系の芸能を伝承する岩手県北上市地方(剣舞)・茨城県日立市(日立風流物と獅子舞)・三重県阿山郡地方(かんこ踊)・鹿児島県喜入町(琉球人踊)・同県坊津町(笠踊・疱瘡踊)などであった。

4　保存科学部

(1)　概　　要

文化財の材質・構造に関する科学的研究，ならびに文化財のおかれている保存環境の自然科学的研究を行い，これらを基礎として文化財の保存に関する技術的研究を行っている。研究の成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。また文化財の年代測定・産地推定の基礎的研究も手掛けている。

研究組織は化学研究室，物理研究室，生物研究室の3室からなっている。調査研究

調査研究

の結果は，修復技術部と共同の機関紙「保存科学」により公表される。

化学研究室

文化財およびその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む）ならびにその結果の公表を職務としている。

内容としては，微量分析または非破壊分析による無機物質・有機物質の材質とその劣化に関する研究，展示・保存環境における汚染因子の究明とそれらの文化財への影響に関する研究，劣化防止に関する研究を行っている。

物理研究室

文化財およびその保存に関する物理的調査研究ならびにその公表を職務としている。文化財自体の構造・強度等の力学的試験を行い，X線・γ線のラジオグラフィーによる内部構造，欠陥，虫害，腐朽の解明を行っている。また赤外線テレビによる銘記，下絵等の判読にリモートセンシングの手法を取り入れる試みを行っている。

また保存環境に関し，採光，照明，温湿度等の影響とその防止の研究を行うほか，展示，収蔵，梱包輸送の際の適正条件の設定と湿度調節技術を開発し，新施設を使用する必要な処置の研究を行っている。

生物研究室

文化財およびその保存に関する生物学的調査研究とその公表を職務としている。文化財の微生物や昆虫等生物による被害調査，加害生物の採集・培養・同定ならびに加害生物の殺菌・殺虫等の防除法の研究開発，実施の指導を行っている。

以上，各研究室担当研究員の専門分野に関する基礎的研究のほか，複合的な判断，処置を必要とする研究対象に対しては部内，部外（他研究機関を含む）との共同研究が行われている。

特別研究「石造文化財の保存，修復に関する科学的研究」は修復技術部との共同研究で，第5年次として，石造文化財および付随する材料として，煉瓦・瓦類の焼成品，土壁，たたき等に関して，それらの劣化機構の解明，保存管理方法，および修理技術の確立を総合的に推進させている。

受託研究は「史跡虎塚古墳彩色壁画保存のための調査研究」，修復技術部と共同の「国宝，重文日光社寺建造物に関する研究」および保存科学部，修復技術部，美術部，情報資料部共同の「鹿の子C遺跡出土の漆紙の研究」が行われた。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 文化財の材質・構造に関する研究

(1) 非破壊分析，微量分析

1）鉛同位体分析

昨年度より引続き，約250点の青銅製造物および鉛鉱石について測定を行った。特に，西日本（九州，四国，中国地方）の弥生時代・古墳時代遺跡から出土する鏡を中心に測定し，数点の鏡と銅利器が朝鮮半島南部の原料で作られていることを確かめた。太安麻呂の墓碑（銅製）が日本産の銅を原料としていることも確認した（馬渕）。

(2) 漆および漆工品に関する研究

1) 古代塗装技法に関する研究

熱分解ガスクロマトグラフィーおよび赤外分光分析によって，漆およびその類似物，膠，ふのり，脂（ヤニ）等の接着剤の種類がわかるようになった。この結果接着剤の種類により，いくつかの古代の塗装技法が明らかになった。（見城）

2）生漆の良否に関する研究

従来，ＪＩＳ規格による生漆の分析を行ってきたが，分析の結果から，生漆の良否を判定することは難かしい。生漆を高速液体クロマトグラフィーで分離し，赤外分光光度計で成分を判定する方法を現在検討中である。（見城）

3）下地塗装の研究

漆塗装素材として，種々の木が使用されている。これらの木の表面の脂と生漆の相互作用によって，漆塗装の外観，接着力，固化速度が異なることがわかった。（見城）

(3) 法隆寺献納宝物特別調査 ―東博―

漆皮箱調査に参加し，Ｘ線透視による構造調査を行った。（江本・石川）

(4) Ｘ線γ線による材質構造調査

新羅仏・青銅鏡の透視による構造調査を行った。（石川・三浦）

調査研究

東京国立博物館図版目録作成に際し，群馬県出土の鉄剣太刀等約150件のX線透視による構造調査を行った。

(5) リモートセンシングの文化財への応用

特定研究1「科学的調査法による日本古代中世絵画の実証的研究」に関連させて，赤外線テレビで得られた画像の画質改良方法の検討を続けている。(三浦)

(6) 古代ガラス玉の屈折率のレーザーによる非破壊測定

He-Ne レーザー（赤色）に加えて He-Cd レーザー（青色）を用いることにより，標準波長に対する屈折率も算出できるようになった。(東博と共同，三浦)

2. 文化財の保存及び展示環境等に関する研究

(1) 施設内の環境調査

展示室・収蔵庫内の温湿度，照明等の環境の測定，新設展示施設のシーズニングの検討を行い，展示，保存環境の適否に関し調査を実施している。(見城，石川)

1）新設施設

田部美術館	(島　根)
渋谷区松濤美術館	(東　京)
宮城県立美術館	(宮　城)
国立歴史民俗博物館	(千　葉)
橿原考古学研究所附属博物館	(奈　良)
大分県立風土記の丘歴史民俗資料館	(大　分)
飯塚市立歴史資料館	(福　岡)
東京国立近代美術館収蔵庫	(東　京)
出雲大社宝物館	(島　根)
鶴岡八幡宮収蔵庫	(神奈川)
岩手県立博物館	(岩　手)

2) 既設施設

博物館明治村，おもに照明について（愛知)(石川)

3) 展示に関する協力

特別展正倉院宝物（56. 10. 31～11. 25）の東京国立博物館開催における展示のための湿度調節（東京)(石川)

(2) 輸送梱包内の湿度調節剤の量と使い方

展示ケースと違って，梱包の場合はケース一杯に美術品が収められ，空間が少くない。そのため湿度調節剤の量，材質による湿度の変動の様子がケース展示の場合と異なる。そこで，材質，空間，調節剤の量の関係を目下検討中である。(見城)

(3) 密封ケース内微気象変化の制御の研究

外界の温度変動があった場合のケース内相対湿度分布の偏りに対して，シリカゲルシートが有効であることを明らかにした。(三浦)

(4) 文化財の保存，展示環境に関する研究

文化財の保存，展示環境に浮遊している粉じんおよび文化財に付着汚染している粉じん等に含まれる高沸点化合物をガスクロマトグラフィーにより分析し，環境汚染の影響と原因を究明している。

空気中からの捕集は，0.2 g の TENAX GC を秤量ビンに入れ7日間環境中に暴露したものを，粉じんは採取したものをそのままそれぞれ 1 ml を注射筒に移して 250°C で追出し PEG 20 M を充塡したカラムを用い分析した。

粉じん中および空気中の高沸点物質の挙動，汚染の原因を検討中。(門倉)

(5) 空気中に暴露されている銅製品の腐蝕生成物と環境汚染について

イオンクロマトグラフィーにより，銅錆中の陰イオンのうち Cl^-，NO^-，SO_4^{2-} イオンを分析し，環境汚染との相関性を検討し，工場地域，住宅地域，道路等で銅錆組成に特徴がみられた。また，銅錆中の炭酸銅の存在は比較的少なかった。継続中。(門倉)

(6) 未開口埋葬施設内の空気に関する研究

従来，空気組成として酸素，窒素，炭酸ガスを主体に測定してきた。本年度は微量試料中のメタンの分析法を検討し，ガスクロマトグラフィーにより PPM オーダーのメタンを分析した。(門倉)

本年度は，東京都世田谷区中神明遺跡横穴と仙台市伊達家墓所石室内および茨城県勝田市虎塚古墳石室内を調査した。(門倉)

分析結果，中神明横穴内メタンは 0.21 ppm 外気中で 1.73 ppm，伊達家墓所石室内 0.21 ppm，外気で 2.02 ppm であった。

3. 文化財の生物劣化とその防除に関する研究

(1) 実態調査と防除対策

保存科学部

文化財に被害を及ぼす生物（微生物，昆虫等）の実態調査を行い，被害の状況に応じて防除対策を検討して助言・指導を行っている。本年度は，下記の調査と防除対策を実施した。（新井・森）

1) 埼玉県立自然史博物館の燻蒸室の調査と助言（新井・森） 56. 5
2) 群馬県立歴史博物館の燻蒸指導（新井・森） 56. 6
3) 世田ヶ谷山観音寺における生物被害調査（新井） 56. 6
4) 東京国立博物館の燻蒸指導（新井・森） 56. 7
5) 足立美術館の燻蒸指導（森） 56. 8
6) 厳島神社大鳥居の虫害調査（新井・森） 56. 8
7) イギリスにおける大江戸美術展出品作品の燻蒸指導，於東博（新井・森） 56. 8
8) 同　上　於京博（森） 56. 8
9) 同　上　於東博（新井・森） 56. 8
10) 国立近代美術館，工芸館の虫菌害調査（新井・森） 56. 8
11) 国立歴史民俗博物館における生物被害等の調査（新井） 56. 8
12) 宮城県立美術館の開館前に発生した虫菌害の調査と防除対策 56. 9
13) 東京国立博物館，収蔵庫燻蒸 56. 9
14) 埼玉県立自然史博物館燻蒸庫試運転指導（新井・森） 56. 12
15) 名古屋市博物館における生物被害調査と防除対策（新井） 57. 2

(2) 文化財の長期保存に関する研究

酸素の遮断性が優れている同時二軸延伸ポリビニルアルコール（BO-PVA）フィルムを，燻蒸後の文化財の保存に応用する研究を継続している。（新井・森）

(3) 微生物学的研究

1) 文化財に着生した糸状菌の水分活性（water activity）を測定して，その文化財の保存環境の履歴を知り，糸状菌防除の手がかりとする研究。（新井）
2) 軸装，刀剣等から分離した糸状菌が材質を劣化する一因として，糸状菌の生成する有機酸を想定し，細管式等速電気泳動装置を用いて，糸状菌が代謝生成する有機酸分析を継続。（新井）
3) 伊達家墳墓感仙殿および善応殿において，未発掘石室内の微生物学的調査お

よび感仙殿遺物の微生物について調査研究。(新井)

(4) 昆虫学的研究

1) 4種の低毒性防虫剤について，海中での効力ならびに溶出量を経時的に測定し，海虫防除の可能性の探求。(森・新井)

2) 殺虫塗料のなかには，混入した殺虫剤の種類によって必ずしも殺虫効力の期待できないものがある。木片に塗布した3積の殺虫塗料にイエシロアリを接触せしめて殺虫効力を比較検討した。(森)

(5) 燻蒸法について

1) 木彫仏像など文化財の加害虫を短時間に殺滅する方法について研究し，減圧法と常圧法を併用することにより燻蒸時間を2時間に短縮することが可能となった。(森・新井)

2) 文化財の燻蒸処理標準仕様書を作成し，燻蒸依頼者が発注時の基準となる根拠を示し施工者に対しては文化財燻蒸作業の必須条件を明示した。(森・新井)

3) コンクリート壁体の燻蒸ガス透過性について継続して研究した。(新井・森)

4) 2枚貝の燻蒸法による殺滅条件を検討した。(森・新井)

4. 考古遺物・遺跡等に関する考古化学的及び保存に関する研究

(1) 水中引揚げ遺物の研究

江差・開陽丸遺物，長崎・鷹島・元冠関係と見られる遺物について，保存処理及びその後の経年変化の点検，収蔵環境の保全等の指導を行った。(江本)

(2) 遺跡の保存

佐賀・久保泉丸山遺跡，静岡・柏谷遺跡の保存委員会に参加し，調査および対策立案を行った。(江本)

5. 文化財の情報処理に関する研究

マイクロコンピュータを大型計算機センターの端末として利用するためのプログラム，個人用データベースのためのプログラム等を開発した。(三浦)

6. 国宝 高松塚壁画保存・修復への協力

(保存科学部，修復技術部 共同)

壁画の保存状況点検が，文化庁美術工芸課によって昭和56年6月に行われたが，その際，微生物汚染，壁画面の状態の点検，殺菌処置および，未施工部分の修復処置を

調査研究

行った。(新井・増田)

B 特別研究

石造文化財—石及び類似材料の保存と修復に関する科学的・技術的研究(8年継続，第5年次，保存科学部・修復技術部　共同研究)

石造文化財および付随する材料として，煉瓦，瓦類の焼成品，土壁，たたき等に関して，それらの劣化機構の解明，保存管理方法および強化修復技術の確立を総合的に推進させるのを目的としている。

本年度は下記の調査研究を重点的に行った。

(1) 凍結融解による石の劣化の研究

岩石の凍結融解繰返し実験を行い，劣化を促進させ，その過程における石の超音波伝導速度の変化を測定した。それによって劣化の程度を判断する方法，および劣化機構の研究を行い多くの知見を得た。試料として用いた石は，従来から樹脂含浸の実験に用いている大谷石（凝灰岩）と白河石（安山岩）である。(三浦)

本年度の招へい研究員，北大低温研究所，福田正己氏の協力を得て，上記の実験，測定のプログラム，測定値の読取りからデータ処理を一環して行えるようになった。

(2) 劣化した石の強化のための基礎実験として昨年に引続き各種の薬剤の含浸処置に関する研究を続けた。その効果判定には凍結融解繰り返し試験または引張り剥離試験等を行った。

古瓦の保存・修復に関しては，シラン（SS 101）含浸による強化と撥水処置後，欠失部を古瓦粉末を混じたエポキシ樹脂で補足整形して再用する研究を行い，この成果は津市専修寺の獅子口瓦の修復に用いられた。(西浦)

(3) 過去に修復処置を実施した石造文化財の経年変化と修復に関する問題点を把握するため，長崎県眼鏡橋その他を追跡調査した。強化処置，擬石処置の耐久性や外観上の変化について知見を得た。(鈴木・樋口・西浦)

(4) 外国における石の保存処置に関する文献収集，過去10年程の期間に，外国で出版された学会誌，雑誌，シンポジウムの記録等の出版物から，石の保存処置に関して特に重要な報告を選択，翻訳し集積している。(三浦・西浦)

C 受託研究

1. 虎塚古墳彩色壁画保存のための研究（茨城・保存科学部）

昭和55年10月に竣工した保存公開施設により一般公開を春季（4月）秋季（10月）に行い，市教育委員会のみで公開を実施することがほぼ軌道にのってきた。しかし，閉鎖中および公開前後の石室内壁画の点検，環境の保全について専門的な事項を受託研究費により実施した。すなわち，石室内および観察室の閉鎖時における温湿度，空気組成，微生物等の調査，公開前後の保存科学的指導，閉鎖のための処置をおこなった。（江本・門倉・見城・新井）

2. 国宝，重文日光社寺建造物の保存に関する研究（栃木・保存科学部・修復技術部）

(1) 二天門の黒化現象の基礎的研究

檜，杉，欅の手板に下地塗装をして，種々の環境下に放置した外観を観察すると欅材は黒いむらができ，特に秋材部分に黒色の塗りむらとして，盛り上がる傾向がある。これに対して，杉，檜の場合には一様な塗装ができる。

実際に二天門の黒くなった試料を顕微鏡でみると，欅材部分が盛り上がっている。今後，欅材の脂止めについての研究を進める。（見城）

(2) 唐油彩色の密陀油に溶解して防カビ効力を示す薬剤を選定し，手板に顔料と防カビ剤を混合した密陀油を塗布して，多湿な環境に保ち，防カビ効力を検討中である。（新井）

(3) 平彩色等の胡粉塗膜剥落の再現実験を継続中であり，かつ膠塗膜の接着強度試験により，膠が10%以下の濃度の液に胡粉等を混合して塗布すると接着強度が著しく減退することが判明した。（新井）

(4) 日光社寺文化財の環境条件を正確に把握するために東照宮，二荒山神社，大猷院で温湿度を継続して記録している。1975～1979年までの記録から月平均気温および相対湿度を一覧表とした。その結果，日光山内の年平均気温と年平均相対湿度は，約10°C，72% RH である。（三浦）

3. 石岡市・鹿の子C遺跡出土の漆紙の研究（茨城：保存科学部，修復技術部，美術部，情報資料部　共同研究）

遺跡の調査面積の数次にわたる追加に伴って出土した漆紙試料100余点について，

調査研究

下記項目の総合的な研究を行った。

(1) クリーニング（青木）

(2) 赤外テレビによる漆紙文書の確認（判読）（石川）

(3) 赤外線写真の撮影（橋本・石川）

(4) 素材（漆，紙）の材質分析と顕微鏡による観察（見城・石川）

(5) 文字，文書の解読（田村）

(6) 保存処置法の検討（樋口・青木）

D 科学研究費

昭和55年度より開始された文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」の第２年次で，研究課題の統合が行われ，当研究所保存科学部関係の研究課題および研究代表者，分担課題および分担者は下記のとおりである。

1. 建造物・美術工芸品の劣化現象と保存修復に関する研究

代表者 伊藤延男

(1) 応急処理した彩色遺物の保存に関する研究総括　江本義理

(2) 膠着剤および有機材料の分析　門倉武夫

2. 古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究

代表者 柳沢孝

(1) 赤外テレビ撮影法の開発と応用の研究　三浦定俊

(2) X線透過法による彫刻の調査研究　石川陸郎

3. 紙の劣化機構の解析と複元化に関する研究

代表者 門屋卓

(1) 紙の保存に関する環境条件の検討　三浦定俊

4. 青銅製造物の材質と技法の研究

代表者 樋口隆康

(1) 化学分析，X線分析　江本義理

(2) 鉛同位体比測定　馬渕久夫

5. 水中遺構・遺物等の探査および保存に関する研究

代表者 茂在寅男

修復技術部

(1) 水中遺物の材質およびその劣化・総括　江本義理

(2) 有機質遺物の保存　見城敏子

(3) 遺物の生物劣化とその対策　新井英夫

5 修復技術部

(1) 概　要

修復技術部は，文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究とその公表を主務とする部で，保存科学部が，主に文化財の保存にかかわる科学的分析研究をつかさどる部であるのに対し，修復技術部は，老化破損し，あるいは後世の付加物のある文化財について，もとの正しい状態に修理し，あるいは復元する方法についての科学的，技術的研究を担当している。

研究対象としては，絵画，書跡，彫刻，工芸品，考古資料などは勿論，木造構造物の組織や細部に描かれた絵や彩色石造構築物などに及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては，3研究室6研究員1専門職員からなっている。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究とその結果の公表を主務とする。

第二修復技術研究室

紙，繊維又は皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的研究とその結果の公表を主務とする。

第三修復技術研究室

石，金属，土又はその他の無機材質の文化財の修復に関する科学的・技術的研究とその結果の公表を主務とする。

各研究室とも，経常的な研究として，有形文化財を構成している材料，構造，製作

調査研究

技法についての研究や，それらを修復するための伝統技術の整理体系と科学的裏付けの資料集積，そして更に科学的な材料，技法の修復への応用と開発のための臨床的な研究などを実施しており，とくに材質強化，補強，接合，剝落防止，朽損部充塡等について各種合成樹脂の応用と技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては，保存科学部との共同研究が必要な部分もあり，また部内においても，一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く，それらについては各研究室員による共同作業によって研究が進められている。これらの詳細は次項に記す通りである。

特別研究「石造文化財—石及び類似材料の保存と修復に関する科学的，技術的研究」は，8ヵ年の継続研究の第5年度として，文献収集，調査，実験研究を行った。(28頁参照)

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

(1) 漆芸品の研究

法隆寺宝物館にある宝物の総合調査は，今年度は漆芸品を対象に行なわれ，東京国立博物館の依頼により参加した。七点ある漆皮箱の調査が主なもので，皮の判別，成形技法，漆芸技法，正倉院所蔵品その他伝世品との比較が行なわれ，X線透視や顕微鏡による詳細な記録が得られた。これらの成果は概報としてまとめられた。(鈴木・中里)

(2) 出土金属工芸品の製作技法の研究

広島県大塚古墳出土短甲の修復処置を通じてパラフィン等を使用した昭和初期の修理について知見を加えるとともに短甲の製作技法調査を行った。また象嵌遺物では沖ノ島遺跡出土鞍金具などの調査を行った。(青木)

(3) 装潢技法の研究

1) 伝統技術としての装潢技法に関する調査研究を継続している。本年は，装潢用具としての刷毛製造の調査記録を東京・京都にて行い，また和紙の加工原料としての布海苔製造の調査・記録を行った。(増田)

2) 装潢技法に関する中国文献の収集及び中国における紙本文化財の修復に関する文

献の収集を行った。(鶴田)

3) 文部省在外研究員(長期)としてアメリカ合衆国に出張中，スミソニアン研究所，国立公文書館，議会図書館において，図書の修復・保存技術について調査を行った。(鶴田)

2. 合成樹脂による彩色保存の研究

1) 重要文化財興福寺北円堂天蓋は，漆下地を施し，その上に漆を塗って彩色してある。昭和39年頃，PVA による剝落どめが施されているが，近年再び剝離，剝落が甚だしくなり，再度剝落どめを京都の宮本滋基氏により施工され，その技術指導を行った。今回の処置は天蓋をはずさずに下から剝離部分に，揺変性アクリルエマルションを注入し，また剝離間隙の少ない箇所には，パラロイドB72溶液を用いた。(樋口，鈴木)

2) 神奈川県称名寺の重要文化財板絵着色弥勒来迎図，弥勒浄土図の剝落どめ処置の現場を調査した。これも薄い漆下地の上に白土をおき，その上からさらに彩色してある。過去に PVA による剝落どめが施されたものであるが，充分な成果が得られなかったので，再びパラロイドB72のトリクレン溶液を用いて中沢一郎氏が剝落どめを施工中であり，その詳細を調査した。(樋口，鈴木)

3) 絵馬保存に関して，岐阜県恵那郡岩村町及び，同郡明智町より依頼があり，岩村町歴史資料館内保管中の絵馬及び，明智町八王子神社の県指定絵馬の現状を実査し，今後の保存方法についての資料を得た。(茂木)

4) 禅定図絵馬(東京都豊島区・法明寺蔵)の彩色剝落どめを実施した。彩色は胡粉の下地層が，かなり厚く脆いため，板の素地から剝離し大きく反りかえっていた。元の状態に戻そうとすれば崩れやすく，難作業になった。アクリルエマルション AC 3444 を使用し，技術的に解決し処理した。(茂木)

3. 木造文化財の合成樹脂による修復技術の研究

本年は我々が直接関係した合成樹脂による木造文化財の修復について特記するものは少ないが，従来のエポキシ系人工木材では処置することが困難であった腐朽によって生じた空洞内部の充塡や表面の虫蝕孔の充塡処置に新たに一液性ウレタン樹脂の利用を試み，目下基礎的な実験をつづけている。(樋口)

4. 石造文化財の修復処置に関する研究

調査研究

(1) 沖縄県那覇市，重文・園比屋武御嶽石門の解体修理に伴う，古石材の含浸強化処置は，シラン溶液（SS-101）を洗滌ビンにより注ぎかける方法により指導した。（西浦，樋口，伊藤）

(2) 長崎県平戸市，重文・幸橋の解体修理に伴う古石材の強化処置について指導を行い，シラン溶液（SS-101）の浸漬含浸処置を行うべく準備中である。又，折損した高欄石のエポキシ樹脂による接着及び擬石による充塡，成形についても指導を行っている。（西浦，樋口）

(3) 三重県津市，重文・専修寺如来堂の修理工事に伴い，大棟獅子口の再用について，その可否及びその為に必要な処置について，調査指導を行った。現地調査の結果，再用は充分可能であり，処置としては，シラン溶液（SS-101）の浸漬含浸処置を行うべきと判断した。（西浦）

(4) 史跡徳一廟石塔（福島県旧慧日寺）の修復に際し，エポキシ樹脂による石材の接着，エポキシ樹脂エマルションによる擬石処置などを指導した。二重笠石と三重笠石の間の軸石は，伊藤所長の指示により補足修理をせずに，のぞき穴のついた鉄製箱型支持枠を二重笠石に接合して三重笠石をのせ，二重軸石部分の舎利容器の入っていた洞を外から観察できるようにした。（樋口）

(5) 重要文化財西郷従道邸（愛知県明治村博物館）の根石表面が厚さ5～6mm風化し層状に剝離して脱落するためその保存処置を指導した。始めこの層状剝離した部分に低粘度エポキシ樹脂を注入して接着することを試みたが，作業能率が悪く広い面積を処理するには適さなかった。そこで層状風化部分を取り除き，シラン溶液（SS—101）を塗布含浸させて強化と撥水性を附与し，更に補足を要する欠失部分には，風化石粉とモルタルセメントの混合物にエポキシエマルションを加えた擬石で修復するようにした。（樋口）

5. 金属製品の修復処置の研究

鉄製品は東京国立博物館保管の大阪府カトンボ山古墳出土品一括，和歌山県丸山古墳出土鉄鏃一括，広島県大塚古墳出土短甲一領のほか，茨城県虎塚古墳，土浦市下郷3号墳，千葉県佐倉市大崎台遺跡の処置を実施した。また象嵌遺物については栃木県佐野市出土円頭柄頭，同横塚古墳出土鍔，群馬県高崎市出土大刀の処置を行った。これらの処理にあたって脱塩の問題点についてそれぞれの方法を比較実験した。

銅製品は福島県真野112号墳出土金銅双魚佩，重要文化財太安万侶墓誌などの保存修復処置をした。青銅製品については，セスキカーボネイト法を用いて処理した時の銅の溶出について実験するとともに，ベンゾトリアゾール法による塩基性塩化銅の安定化処理の技術的確立と処理システムの体系化について検討した。

長崎県松浦郡極楽寺蔵銅造如来像は鍍金の上に後世漆で金箔が貼られ，仏像本来の姿が損われていた。この漆を剝がし，像本来の姿をとりもどすため種々の実験をした結果，50%フェノール水溶液を湿布した後，赤外線ランプで加熱して，漆を膨潤させて除去し，最後に流水で良く洗浄した。この像は後に重要文化財に指定された。（樋口・青木）

6. 遺跡・遺構・遺物の保存に関する研究

(1) 世田谷区神明横穴古墳の入口を閉塞していた関東ロームの土塊の取り外しと同遺跡内の小貝塚の取り上げを硬質ウレタンを用いて取りあげた。土層の剝ぎ取りについては，硬化したエポキシ樹脂の柔軟化のためシンタロン，チオコールなどを添加した時の物性について検討し，それを用いて神奈川県大和市上野遺跡の関東ローム層の剝ぎ取り実験をしたが，含水率の高い土層であたため接着不良をおこすなどの支障があり，今後改良の余地が残されている。（樋口，青木）

(2) 柏谷横穴古墳（函南町）の保存処置として，埼玉大学理学部で研究された土の表面に撥水剤を噴霧して土の崩壊を防止する実験が行われ，これに江本保存科学部長とともに立会った。（樋口）

B 特別研究（保存科学部と共同研究，28頁参照）

劣化した石の強化，保存の為の樹脂処置については，基礎実験を継続的に行って来ているが，現在迄に得られた多くのデータを序々に整理統合し，より詳細な実験，研究へと移行しつつある。今迄に得られたデータに依れば，強化用樹脂としては，有機シリコーン樹脂（メチルトリエトキシシラン系）の有機溶剤溶液〔商品名 SS-101〕が極めて優秀である事が明らかになっている。（西浦）

又，劣化石に対する新しい保存修復処置方法として，劣化生成物である石コウ（硫酸カルシウム）をカルサイト（炭酸カルシウム）に再転換させる方法について調査，実験を開始した。（西浦，三浦）

調査研究

石造品修復の際の欠損部の充塡，成形に用いる樹脂擬石についても継続的に実験，研究を進めているが，アクリル樹脂，エポキシ樹脂とシリコーン樹脂（シラン）との混合樹脂がその耐久性において非常に優れていることが判った。（西浦，樋口）

石造物の保護処置としての撥水剤塗布処置に関して，多くの撥水剤について試験を行ったが，防水効果，特にその耐久性において，前述のシラン（SS-101）が極めて優秀である事が確認された。（西浦）

瓦の保存，修復に関しては，表面の黒いカーボン層が消失し黄褐色化した瓦の保護及び補色を目的とした樹脂と松煙の混合物の塗布処置について，塗装部の耐久性を調べる為の実験を継続中である。（西浦）

過去に実施した石造文化財の修復処置例を追跡調査して経年変化と修復の問題点の把握に勉めるべく，昭和54年度来調査を行って来ているが，本年度は，オルト邸（長崎市），眼鏡橋（諫早市），の調査を行った。（樋口，西浦，鈴木）

C 受託研究

1. 仙台伊達政宗公墓所出土副葬品の保存処置に関する研究（Ⅳ）（宮城）

先年度より継続の白梅蒔絵手箱漆膜移植処置は，今年度は蓋の漆膜の貼付施工を行った。

反り返りを防ぐためアクリル板に挟んで水浸にしておいた蓋の分の漆膜は，貼りやすい様に付着物の除去を行い，割離した漆膜は割口を合せて整形する作業をまず行った。

一方実測によって箱の原形を復原する事につとめ，それを元に漆膜を貼付けるための木製の箱を外部の業者に依頼して製作させた。

この箱の漆芸施工は極めて特異で，下地を施さず，皮貼りの上に直接薄く塗漆しており，現状では薄い漆膜のみの状態にあるので，科学的処置は施さず，直接素地に貼付ける事とした。貼付方法は，接着剤として麦漆を試みる事とし，押えには主に油粘土を使用した。

先述の様に皮の上に塗漆するので，皮特有の細かなしわが塗膜に現われており，貼付けによって，そのしわが延びてしまう事を懸念したが，ある程度は旧状の状態を保持出来た。

2. 重要文化財五輪塔の保存修理研究（大分）

阿蘇凝灰岩製の一石五輪塔で火輪に「弘安八年乙酉五月廿四日」の刻名がある。地輪，水輪，火輪が大きく鱗片状に剝落している。

破損の主な原因は地下から吸水された水が凍結することによって石材が鱗片状に剝離したと思われたので，石材の強化と撥水性の付与のためアルキルアルコキシポリシランの約35%トルエンメタノール混合溶媒溶液（SS-101）をガーゼを巻いた石材に毛細管吸上法にて含浸させた。その結果吸水率は処置前 28.4% から処置後2.3%に改良された。

鱗片状に剝離した破片はエポキシ樹脂（主剤アラルダイト CY 230 100部，硬化剤エポメート B-002 50部，圧縮破壊強度 746 kg/cm²）で接着し，若干の欠失部については上記エポキシ樹脂100部，石粉200部，ガラスマイクロバルーン30部，松煙適量の混合比の擬石（圧縮破壊強度 359 kg/cm²）を用いて補修した。

3. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究（栃木）

（保存科学部と共同研究29頁参照）

D 科学研究費

昭和55年度より開始された文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」の第２年次で，研究課題の統合が行われ，当研究所修復技術部関係の研究課題および研究代表者，分担課題および分担者は下記のとおりである。

1. 建造物・美術工芸品の劣化現象と保存修復に関する研究　代表者　伊藤　延男

1）応急処理した彩色遺物の保存に関する研究　総括　江本　義理

(1) 壁画の保存処置の研究　樋口　清治

2）漆文化財の保存法の研究　総括　熊野谿　從

(1) 上代漆芸品の保存修復に関する実証的研究　中里　寿克

2. 水中遺構・遺物等の探査および保存に関する研究　代表者　茂在　寅男

1）水中遺物の材質およびその劣化　総括　江本　義理

(1) 水中金属遺物の保存に関する研究　青木　繁夫

3. 遺構・遺物の探査および保存修復に関する研究　代表者　田中　琢

1）遺構断面層序の剝ぎ取り保存および貝層断面の保存法　総括　樋口　清治

調査研究

(1) 遺構保存処理および考古学的検討　　青木　繁夫

4. 社寺等古建築の外部化粧としての漆塗装の耐久性に関する実験的研究

（奨励研究(A)　研究者　西浦忠輝）

6 情報資料部

(1) 概　　要

情報資料部は，従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成，収集，整理，保管等の業務を充実発展させ，さらに研究所各部の所掌にかかる資料を対象とすることを目的として昭和52年4月に発足した。当部はその資料を文化財関係事業のみならず，国の内外の研究者の利用に供して，文化財に関する研究資料センターの役割を果している。当部研究員はこれら業務を行うとともに，各専門領域における調査研究を進め，その成果を機関誌「美術研究」及び美術部・情報資料部合同で毎年開催される公開学術講座などで発表している。なお本年度は第5回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」を美術部と共同で担当した。

研究組織は文献資料研究室と写真資料研究室の2室よりなる。

文献資料研究室

研究文献資料の収集，整理，保管，閲覧等の業務を分担するとともに，毎年，日本・東洋古美術に関する雑誌論文及び単行図書を分類集録した文献目録を編纂し，美術史学界はじめ関連学界に貢献している。定期刊行物所載古美術関係文献については前回の昭和11～40年の目録に引続き，昭和41年以後の目録作成準備を続行中。

これらの業務のほか，当室研究員は，日本・東洋古美術各分野で，専門的調査研究を進めてその成果を公表し，また落款・印章に関する特別研究に参加した。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成，収集，整理，保管，閲覧を行うとともに，各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し，研究用写真資料の収集，作成につとめた。また，これに平行して，美術研究所当時に撮影したガラス製写真原板の転写を昨年度に

引続き実施した。

これらの作業のほか，当研究室員は日本・東洋古美術研究の各分野で専門的調査研究を進め，その成果を公表した。また，科学研究費による特定研究「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」(代表者　柳澤孝）に参加した。

(2)　研究調査活動

A　一般研究

1.　日本・東洋古代彫刻史研究

(1)　わが国の小金銅仏の調査と新羅仏の研究を行い，ことに従来不明とされていた新羅仏の技法の解明につとめた。(久野)

2.　日本古代中世絵画史の研究

(1)　仏教説話画の研究

富岡美術館蔵釈迦説法図（宇佐神宮旧蔵神輿障子絵）の調査研究。(関口・米倉)

広島県持光寺蔵釈迦八相図の調査研究。(関口)

(2)　仏教絵画の研究

千葉県所在の仏教絵画について，西光寺外八ヶ寺に所蔵される涅槃図8幅，福善寺蔵両界図，東光寺蔵十二天像を調査。(関口)

(3)　科学的方法による材質技法の研究

特定研究「古代中世における絵画彫刻染織品の材質技法に関する科学的研究」(代表者　柳澤孝）に参加し，鳳凰堂壁扉画および法界寺阿弥陀堂柱絵を調査。(関口)

(4)　古代・中世やまと絵の研究

フリア美術館蔵の平安・鎌倉やまと絵資料ならびに関連仏教絵画遺品を調査した。(江上)

(5)　高僧伝記絵の研究

継続中の法然上人伝絵研究の一環として，現存諸本中最古の本奥書を有する写本「本朝祖師伝記絵詞」(久留米市　善導寺蔵）の調査を行った。またこれまで調査しえた法然上人伝絵諸本・諸資料を基にその系統研究を行った。(米倉)

(6)　絵巻の研究

別掲の科学研究費による「大和絵模本の研究」として金刀比羅宮所蔵為恭旧蔵模本

調査研究

の調査を行い，多くの絵巻関係資料を蒐集した。(米倉)

3. 日本近世絵画の研究

(1) 近世初期水墨画の研究

奨励研究(A)「日本近世初期水墨画の研究（友松，宗達，又兵衛を中心に)」によりMOA 美術館，兵庫県常栖寺をはじめ個人コレクションの関連作品の調査資料収集を行った。(鈴木)

(2) 江戸絵画の研究

渋谷区立松濤美術館にて特別展示「若冲展」出陳作品の調査を行った。(鈴木)

4. 東洋古代絵画史研究

(1) 図版入りの宋・高麗版経の研究

図版入りの宋および高麗版経との関連で，宋および高麗版経の基準作を調査した。(長滝寺宋版一切経，安国寺高麗版大般若経，東大寺高麗版一切経など)(江上)

(2) 西域古代絵画史研究

招聘研究員のリブー女史を迎え，相互の情報交換の機会を得，特にアスターナ出土資料について幾多の新知見を得た。また敦煌画に関する資料整理及び研究を続行中(上野)

5. 東洋美術の地域間交流に関する文献資料の研究

今年度開催の「東アジアにおける美術交流」のシンポジウムに備えて，関係文献の調査収集研究を行った。(上野・江上・米倉)

B 科学研究費

「大和絵模本の研究」

(一般研究(C) 研究代表者 米倉迪夫，研究分担者 江上 綏)

江戸時代において，画家が古画実見の折に描き留めた模本類は画家の古画学習・伝習の跡をうかがうことのできる貴重な資料である。同時にそれは現存しない古画作品の姿を留めていたり，原本伝来の経緯を物語る資料を含む可能性を有する貴重な研究資料である。当研究は現存するこのような模本類の中でも大和絵関係の模本資料に焦点をあてる。今回の研究においては土佐家，住吉家，為恭旧蔵の各模本類を主たる対象として調査を進め，写真資料の作製を行い，各々の画系や画家の古画学習・伝習の

実態を明らかにすると共に，原作品に関わる資料を抽出する。

第1年次である本年度は香川県金刀比羅宮所蔵の岡田為恭旧蔵模本約200巻の調査並びに写真撮影を行った。当模本類は復古大和絵作家為恭にふさわしく，絵巻物・古調度・古装束類を主たる内容とする。また必ずしも為恭自筆の模本類ばかりではなく，年紀と署名により為恭自筆と明らかに判明するものはわずかで，他から譲り受けたと思われるものも含まれている。

「日本近世初期水墨画の研究」（奨励研究(A)　研究者　鈴木廣之）

16世紀末から17世紀初頭にかけて（慶長～寛永年間）には，桃山時代をしめくくり江戸時代の先き駆けとなった様々な絵画現象が起こったが，伝統的な水墨画の分野にも創造の可能性を試みようとする過渡期的様相が観察できる。本研究では，従来の流派別の絵画史観にとらわれず，この時期に重要な作品を遺した海北友松，宗達，岩佐又兵衛らの水墨作品に的を絞り，あわせて山楽，内膳，重信ら同時期の狩野派あるいは松花堂昭乗ら余技の画家による水墨画をも含めこの時期の水墨画の新様式について多角的な検討を行った。また作品の調査に当たっては詳細な写真撮影を行って資料とした。

7　主要研究業績

①：著書　②：論文　③：解説　④：研究発表　⑤：講演・放送　⑥その他

昭和56．4～昭和57．3

伊藤　延男（所長）

② 古寺探訪　現代に生きる古寺―西・東本願寺―　「探訪日本の古寺」8　56．5

② 特集2　古建築の住空間―構成と生活イメージ―　ディテール　70　56．10

③ 奈良―古代日本へのいざない―　「楽土残照」56．10

② 本堂平面の系譜　「日本古寺美術全集」11　56．11

③ 図版解説　長寿寺本堂　常楽寺本堂　善水寺本堂　金剛輪寺本堂　西明寺　本堂　三重塔　「日本古寺美術全集」11　56．11

② 保存のための科学と技術　仏教芸術139　56．11

③ 図版解説　醍醐寺　五重塔　金堂　薬師堂　仁和寺五重塔

調査研究

「日本古寺美術全集」 14　57. 1

② 木材年輪年代学序説　保存科学　21　57. 3

美　術　部

川上　涇（美術部長）

④ 歴代名画記と正倉院絵画

第5回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」 56.10

⑤ 中国の山水画　第15回美術部・情報資料部公開学術講座　57. 3

田村　悦子（主任研究官）

② 散文（物語・草子類）中における和歌の書式について　美術研究　317　56. 7

② 親鸞の，特に坂東本『教行信證』の筆蹟について　上　美術研究　318　57. 1

柳沢　孝（主任研究官）

① 当麻寺（大和の古寺2）　岩波書店　57. 3

② 織成当麻曼陀羅について　「当麻寺」所収　57. 3

④ 東寺西院両界曼荼羅の様式的検討　―特に晩唐絵画との関連―

第5回文化財保存修復国際研究集会 「東アジアにおける美術交流」　56.10

④ 織成当麻曼陀羅　美術部・情報資料部研究会　57. 3

⑥ 「科学的調査法による日本古代中世絵画の実証的研究」56年度年次報告（共同執筆）

特定研究「古文化財」報告書　57. 3

猪川　和子（主任研究官）

② 鎌倉時代の仏像　―運慶と東国―

（探訪日本の古寺）　第一出版アート・センター　56. 5

② 石山寺の美術（古寺美術全集）　集英社　56.11

② 涅槃彫像　美術研究318　57. 1

③ 図説寺院めぐり必携　（大法輪選書）　56. 5

⑤ 天平彫刻から平安初期彫刻へ　目黒区教育委員会婦人学級　56. 6

田実　栄子（主任研究官）

④ 中世から近世初期の中国渡来染織品とその影響

第5回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」 56.10

④ 修復完了の重文「片倉家伝来小紋胴服」，及び調査・研究中（修復前）の「日光輪王寺伝来胴着三領」
昭和56年度第2回染織品保存科学サロン 57. 2

③ 輪王寺舞楽装束 日光山輪王寺舞楽装束展（サントリー美術館） 56. 9

陰里　鉄郎（主任研究官）

② 黒田清輝「近代美術の開拓者」3 有斐閣新書 56. 8

② 中原悌二郎「近代美術の開拓者」4 有斐閣新書 56. 9

② 明治20年前後における洋画の一側面
―曽山幸彦筆「武者試鵠之図」を中心に― 大和文華69 56. 9

② 日本における印象派の展開　印象派―パリと日本―展目録 富士美術館 56. 10

② 関根正二　夭折の天才画家・関根正二と村山槐多展目録 朝日新聞社 56. 10

② 石井柏亭――人と芸術 「石井柏亭画集」信濃毎日新聞社 57. 3

② 黒田清輝の素描
東京国立文化財研究所美術部編「黒田清輝素描集」日動出版 57. 3

③ 雅展「近代日本の洋画」作品解説 56. 10

③ 近代洋画人物画10選（美の美） 日本経済新聞 56. 11. 30～12. 10

④ 萬鉄五郎とふるさと 岩手県和賀郡東和町教育委員会 56. 5

④ 村山槐多・その軌跡 信濃デッサン館 56. 5

④ 黒田清輝について 弘前市博物館 56. 5

⑤ 書評・土居次義著「水彩画家大下藤次郎」 みづゑ918号 56. 9

宮　次男（第一研究室長）

② 御伽草紙絵について 「在外奈良絵本」角川書店 56. 5

② 東寺の弘法大師行状絵巻について 「弘法大師行状絵巻解説」東京美術 56. 5

② 法華経美術の特質 「法華経の美術」佼成出版 56. 9

② 法華経の美術 太陽223 56. 9

② 日本の説話画 古美術61 57. 1

④ 極東の法華経見返―絵特に宋版法華経を中心にして―
第5回文化財保存修復国際研究集会 「東アジアにおける美術交流」 56. 10

⑤ 説話画の話 女子美術大学 57. 1

調査研究

⑤ 地獄と極楽の絵画の特色　アサヒカルチャーセンター　57. 2

増田　勝彦（第一研究室）

⑥ 西洋美術品修理に応用するための装潢技術の実技研修会

ベニス・ローマ　1981. 10～1982. 6

⑤ 日本及びヨーロッパにおける手漉紙の技術，その共通点と相違点について

ローマ　1982. 5

関　千代（第二研究室長）

① 近代の絵巻—前田青邨　小学館　56. 11

① 明治宮殿杉戸絵　京都書院　57. 2

③ 院展の流れ　展覧会カタログ　56. 10

三輪　英夫（第二研究室）

③ 黒田清輝年譜　「黒田清輝素描集」　57. 3

⑤ 明治初年の洋画について　世田谷婦人大学　56. 6

三隅　治雄（芸能部長）

① 民俗芸能辞典（共著）　東京堂出版　56. 9

① 芸能の成立と伝承（NHK 大学講座）　日本放送出版協会　56. 10

② 日本芸能史の中の万歳　「ことほぐ—万歳の世界—」　白水社　56. 6

② 民俗芸能の伝承　「芸能史研究」76号　57. 1

② 来迎会と地獄芝居—房総の念仏芸２—　「芸能の科学」14　57. 3

② おん祭の神事芸能　春日若宮おん祭の神事芸能（奈良県教育委員会）　57. 3

② 常磐津・富本・清元・新内の歴史的背景　「日本古典音楽大系」第７巻　57. 3

② 豊後浄瑠璃の発生　「日本古典音楽大系」第７巻　57. 3

② 豊後節の興隆と江戸浄瑠璃の衰退　「日本古典音楽大系」第７巻　57. 3

③ 三線と三味線と　歴史と人物124号　56. 10

③ 郷土芸能の生き方—手賀沼周辺地域民俗芸能—　我孫子市史研究６　57. 3

③ 日本人と神・芸能の伝播と信仰をめぐって（対談本田安次と）

「探訪神々のふるさと」第４巻　57. 3

③ みんよう対談　「みんよう文化」34号～45号　56. 4～57. 3

③ はねばはねよの民俗　「国立劇場」筋書　57. 3

④ シムポジウム「仮面の世界」 西武美術館 56. 6

④ シムポジウム「日本民族文化の比較研究」Ⅲ 音楽と芸能 国立民族学博物館 57. 1

⑤ 民俗芸能伝承の基盤 芸能史研究会 56. 6

⑤ 日本人と芸能 勝山市教育委員会 56. 11

⑤ 民謡の話 新湊市教育委員会 56. 11

⑤ 神語りの世界 芸能部公開学術講座 56. 12

⑤ 日本の人形芝居 民俗芸能鑑賞講座 国立劇場 57. 1

⑤ 日本の民謡 九州文化協会 57. 2

⑤ 日本舞踊の流れ—とぶ・はねる— 国立劇場 57. 3

⑤ 羽衣伝説について 朝日芸能サロン 57. 3

⑥ 大学講座「芸能の成立と伝承」 NHKテレビ 56. 10～57. 3

佐藤 道子（演劇研究室長）

⑤ 修二会の由来 ダルマ・サンガの会 56. 4

⑤ “鬼”の話—悔過会と鬼— ダルマ・サンガの会 56. 5

⑤ 祖師供養のさまざま 奈良国立博物館特別展公開講座 56. 5

⑤ 声明—日本音楽の源流— 岡山市立市民文化ホール 56. 5

④ 「公」と「私」の修二会 二月堂研究会 56. 7

⑤ “鬼”の話—中国の鬼— ダルマ・サンガの会 56. 7

⑤ 法華八講について 上智大学 56. 7

松本 雍（演劇研究室）

② 法隆寺の勧進猿楽をめぐって 能楽タイムズ 56. 8

② 狂言の動作単元（一）—和泉流小舞について— 「芸能の科学」14 57. 3

③ 綜合新訂版「能楽全書」解題・補注 『能楽全書』第6巻 56. 8

⑤ 能における＜語り＞の成立 芸能部公開学術講座 56. 12

⑥ 10月の舞台評“若手の台頭” 能楽タイムズ 56. 12

蒲生 郷昭（音楽舞踊研究室長）

② 邦楽用語辞典 “準楽曲”編(3)(4)(5)，理論用語編(1) 季刊邦楽27号～30号 56. 6～57. 3

調査研究

② 能から義太夫へ　「日本古典音楽大系」第5巻　56. 6

③ 日本音楽関係項目　「音楽大事典」第一巻，第二巻　56. 10，57. 1

④ 「唄（うた）」字について　東洋音楽学会第32回大会　56. 10

⑤ 能の音楽　大阪能楽観賞会能楽教養講座　56. 10

⑤ 芝居歌の「獅子もの」の「石橋」をめぐって　箏曲の伝統を守る会　57. 2

横道萬里雄（音楽舞踊研究室）

② 能への視座　「能楽全書」第5巻　56. 8

⑤ 能の作品と演出　NHK文化センター　56. 4～6

⑤ 能の音楽　モナッシュ大学　56. 7～9

⑤ 日本の古典芸能　モナッシュ大学　56. 7～9

⑤ 能・狂言と周辺の芸能　NHK文化センター　56. 9～12

⑥ 「観世寿夫著作集」（編集）　平凡社　56. 4

⑥ 日本民族文化の源流（シンポジウム）　国立民族学博物館　57. 1

⑥ 鷹姫　申楽の座　57. 2

加納　マリ（音楽舞踊研究室）

② 笙の合理性について　雅楽界56号　56. 7

② 豊後浄瑠璃の三味線と囃子　「日本古典音楽大系」第7巻　57. 3

② 江戸時代の音楽家たち　「芸能の科学」14　57. 3

③ 音楽家（日本の）　音楽大事典（平凡社）第一巻　56. 10

羽田　昶（民俗芸能研究室長）

② 狂言の動作単元（一）―和泉流小舞について―　「芸能の科学」14　57. 3

③ 能面と能の演出　「能のおもてⅡ」　57. 3

③ 盤渉早舞舞返し・序ノ舞　「笛の音楽」　56. 10

③ 石橋・延年の舞　「飛ぶ・跳ねる」　57. 3

⑤ 語りの芸　芸能部公開学術講座　56. 12

⑥ 80年の能界　「演劇年報」　56. 5

⑥ 梅若年譜　「華の能」　56. 11

⑥ 書評『観世寿夫著作集』　能楽タイムズ　56. 11

中村　茂子（民俗芸能研究室）

② 神田の田植と奉納芸　「芸能の科学」14　57. 3

④ 田楽芸の様式　芸能部連続研究発表会　56. 7

⑥ 頑張れ！　周防の猿まわし　大衆芸能資料集成月報10　57. 2

仲井幸二郎（民俗芸能研究室）

② 三絃小歌曲と民謡　「日本古典音楽大系」第8巻　56.12

③ 口訳民謡集　みんよう文化　56.4～57.3

秋田馬子唄・ボンボコニヤ・外山節・日光和楽踊・佐渡おけさ・道南口説・江差追分・越中おわら節・磯節・からめ節・新相馬節・八木節

③ 越中民謡の流転　泉35号　57. 2

③ 民謡口訳の意図するもの　魚津国文1号　57. 3

⑤ 民謡と生活1　日本民謡協会講習会　56. 6

⑤ 民謡と生活2　日本民謡協会講習会　56. 7

⑤ 民謡の周辺1　日本民謡協会講習会　56. 7

⑤ 越中・津軽・江差　全国民謡民舞講習会（富山）　56. 7

⑤ 民謡の周辺2　日本民謡協会講習会　56. 8

⑤ 日本民謡の知識Ⅱ（カセット）　日本民謡協会　56. 8

⑤ 祝唄と作業唄と　田無文化協会　56. 9

⑤ 民謡の変容と伝播　全国民謡民舞講習会（広島）　57. 2

⑤ 風の盆の唄と踊　全国民謡民舞講習会（藤枝）　57. 2

⑥ 「歳時記」歌謡選　世界文化社　56.7

⑥ コンピューターによる「日本民謡歌詞」の整理・分析

慶応義塾大学言語文化研究所　57. 3

保存科学部

江本　義理（保存科学部長）

② 彩色顔料の材質調査　国宝本願寺唐門修理工事報告書　56. 4

② 香深井A遺跡出土鏃等に付着していた赤色および黄色顔料について

オホーツク文化の研究 3　香深井遺跡　下　附篇　大場・大井編（東京大学出版会）　56.11

調査研究

② 脱塩・保存処理（分担）　開陽丸　海底遺跡の発掘調査報告Ⅰ　57. 3

② 展示ケース，展示・収蔵棟について

埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書　57. 3

② 応急処理した彩色遺物の保存に関する研究

古文化財に関する保存科学と人文・自然科学　昭和56年度年次報告書　57. 3

⑤ 水中遺物の保存に関する研究

古文化財に関する保存科学と人文・自然科学　昭和56年度年次報告書　57. 3

④ 古代ガラスの放射化分析（富沢らと共同）　第3回古文化財講演会大会　56. 5

⑤ 文化財の材質と劣化　第3回文化財虫黴害保存研修会　56. 9

門倉　武夫（主任研究官）

④ 古墳壁画の公開時の石室内環境保全　第11回文化財保存修復研究協議会　57. 2

石川　陸郎（主任研究官）

② 浄土寺阿弥陀三尊像とその視覚的環境について

東京芸術大学美術学部紀要―17号―　56. 3

⑤ アメリカ西部の博物館における展示環境について

古文化財科学研究会例会　56. 5

馬渕　久夫（化学研究室長）

② 龍虎鏡および連弧文鏡の鉛同位体比　宮崎県総合博物館研究紀要第6輯　56. 5

① 考古学のための化学10章（富永と共編著）　東京大学出版会　56. 8

② 鉛同位体比測定における固体用質量分析計の質量差別補正項

分析化学 vol. 30, No. 9　56. 9

② 鉛同位体比法による漢式鏡の研究（平尾と共著）　MUSEUM 370・　57. 1

② 福岡市立歴史資料館が保管する鏡の鉛同位体比

福岡市立歴史資料館研究報告第6集　57. 3

② 福岡市藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡の鉛同位体比

福岡市埋蔵文化財調査報告書第80号　57. 3

② 埼玉県稲荷山古墳辛亥銘鉄剣・銘文金線の材質調査（沢田，秋山と共著）

上記鉄剣修理報告書（埼玉県教育委員会）　57. 3

② 青銅製遺物の材質と技法の研究（樋口らと共著）

文部省科学研究費特定研究「古文化財」昭和56年度年次報告書　57. 3

⑥　研究所紹介―東京国立文化財研究所　考古学と自然科学14号　57. 3

見城　敏子（物理研究室長）

②　漆類似天然物の赤外吸収スペクトル　保存科学21号　57. 3

②　A RAPID-RESPONSE HUMIDITY BUFFER COMPOSED OF NIKKA PELLETS AND JAPERNESE TISSUE

Studies in Conservation No. 1　1982. 2

③　中国漆の意外な使われ方　ポピュラーサイエンス　57. 3

④　中国漆の見聞記　古文化財科学研究会例会　57. 3

③　文化財の展示環境　第11回文化財保存修復研究協議会　57. 2

三浦　定俊（物理研究室）

②　木材年輪年代学序説（伊藤と共同）　保存科学21号　57. 3

②　環境システムとしての展示ケース　同　上

②　マイコンのための TSS 端末用プログラム　同　上

③　ICOM 保存委員会第6回大会（オタワ）に参加して　同　上

④　Studies on the Behavior of RH within an Exhibition Case（II）

ICOM 保存委員会第6回大会（オタワ）　56. 9

④　Survey of a Sculpture of Buddha Using XCT　同　上

④　システム論的にみた美術品展示ケースの設計（II）

第20回 SICE 学術講演会　56. 7

④　科学的調査法による日本古代中世絵画の実証的研究（秋山・柳沢らと共同）

特定研究「古文化財」昭和56年度年次報告書　57. 3

④　紙の劣化機構の解析と復元化に関する研究（門屋・臼田らと共同）　同　上

④　環境システムとして見た展示ケースの設計　第3回古文化財講演会大会　56. 5

⑤　密閉された展示ケース内の湿度調整　第11回文化財保存修復研究協議会　57. 2

新井　英夫（生物研究室長）

②　木彫仏像など文化財の燻蒸時間短縮法について（森と共同）

保存科学21号　57. 3

②　木造建造物に発生した変形菌について　保存科学21号　57. 3

調査研究

③ 博物館等の燻蒸設備について（その２）（森と共同）文化財の虫菌害２号 56. 6

③ 文化財の燻蒸処理標準仕様書とその補遺（改訂版）（森と共同）

(財)文化財虫害研究所 56.10

④ 文化財の燻蒸と燻蒸後の保存措置（森・見城と共同）

第３回古文化財講演会大会 56. 5

④ 古糊中の有機酸について 同 上 56 5

④ 文化財の保存とイソタコフォレシス（阿部，北村と共同）

第１回イソタコ研究会 56.11

⑤ 書籍・古文書等の微生物被害とその対策，第３回書籍・古文書等のむし・かび害保存対策研修会講演 (財)文化財虫害研究所 56. 6

⑤ 文化財の微生物被害とその対策，第３回文化財虫微害保存研修会講演

(財)文化財虫害研究所 56. 9

⑤ 文化財の燻蒸による殺菌，第１回文化財の燻蒸実務講習会講演

(財)文化財虫害研究所 56.10

⑤ 文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会講演

(財)文化財虫害研究所 57. 2

⑥ 文化財の生物による被害について 理窓261号 56. 7

⑥ 水中文化財の海中対策（予報）（森と共同） 古文化財の科学 26号 56.12

森 八郎（生物研究室）

② 殺虫塗料の効力試験 家屋害虫９・10 56.10

② 木彫仏像など文化財の燻蒸時間短縮法について 保存科学21 57. 3

③ ヒラタキクイムシ 生活と環境26(4) 56. 4

③ 文化財害虫とその防除（Ⅰ） 文化財の虫菌害２ 56. 6

③ 博物館等の燻蒸設備について（その２）（新井と共同） 同 上２ 56. 6

③ 文化財害虫とその防除（Ⅱ） 同 上３ 57. 1

③ 文化財の燻蒸処理標準仕様書とその補遺（改訂版）（新井と共同）

(財)文化財虫害研究所 56.10

③ アメリカの侵入者，アメリカカンザイシロアリ *Incisitermes minor* (HAGEN)

家屋害虫 11・12 57. 3

④ 文化財の燻蒸と燻蒸後の保存措置（新井・見城と共同）
第3回古文化財科学研究会講演会大会 56. 5

⑤ シロアリの生態と駆除講演 茅崎が市役所 56. 5

⑤ 書籍古文書等を加害する昆虫とその防除対策，第3回書籍・古文書等のむし・かび害保存対策研修会講演 (財)文化財虫害研究所 56. 6

⑤ シロアリ，ウルトラアイ（TV） N. H. K. 56. 6

⑤ 屋内有害生物の種類とその防除，浅間綜合病院創立20年記念講演
浅間綜合病院 56. 6

⑤ 文化財の虫害と防除，第3回文化財虫黴害保存研修会講演
(財)文化財虫害研究所 56. 9

⑤ 文化財の燻蒸，第1回文化財の燻蒸実務講習会講演 同 上 56. 10

⑤ 文化財の虫害とその防除，第3回文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会講演 同 上 57. 2

⑤ 家屋内一般害虫とその防除，第17回ねずみ衛生害虫駆除技術研修会講演
(財)日本環境衛生センター 57. 3

⑥ 水中文化財の海中対策（予報）（新井と共同） 古文化財の科学26号 56. 12

鈴木 友也（修復技術部長）

② 輪王寺の工芸 宗教工芸5月号 56. 5

② 中尊寺の工芸 宗教工芸9月号 56. 9

② 戦うもののふたち 日本歴史展望第4巻 56. 6

③ 新指定重要文化財4 工芸品Ⅰ 毎日新聞社 56. 7

③ 新指定重要文化財5 工芸品Ⅱ 毎日新聞社 57. 3

③ ふるさとの文化遺産（兵庫県の文化財図鑑）工芸篇
社団法人 日本青年会近畿地兵庫ブロック協議会 57. 3

③ 島原，南高の文化財 長崎県文化財調査報告書第59集 57. 3

③ Chanoyu-gama : Iron Kettles for chanoyu
CHANOYU Quarterly TEA and THEARTS OF JAPAN 27 56.

⑤ 文化財の調書作成各論 工芸品Ⅰ 指定文化財展示取扱講習会 56. 7

中里 寿克（第一修復技術研究室長）

調査研究

② 平安時代漆芸技法資料X　保存科学21号　57. 3

② 城山遺跡出土漆器の技法と保存（樋口と共）　城山遺跡調査報告書　56. 3

西浦　忠輝（第一修復技術研究室）

② Conservation of Old Rooftiles for Reuse. The Conservation of Stone II　56. 10

③ 石の保存に関する国際シムポジウムに参加して　保存科学21号　57. 3

④ 木材の寸法安定化処理と接着性（共同）　第31回日本木材学会大会　56. 4

④ Conservetion of Old Rooftiles for Reuse. International Symposium on the Conservation of Stone (Bologna, Italy)　56. 10

鶴田　武良（第二修復技術研究室長）

② 方済筆富岳図と漂客奇賞図・補遺　国華1042号　56. 5

② 陳逸舟と陳子逸—来舶画人研究　四—　国華1044号　56. 8

② 王寅について—来舶画人研究—　美術研究319号　57. 3

② 牛石慧筆叭々鳥図　美術研究319号　57. 3

④ 在米中国絵画資料について　美術部情報資料部研究会　56. 12

④ アメリカの美術館の修復部門—報告—　修復技術部研究会　56. 11

⑥ 報告・在米中国絵画資料調査　文化庁月報 No. 159　56. 12

樋口　清治（第三修復技術研究室長）

② 古文化財の修復と高分子（堀岡，青木共）　日本接着協会誌17巻11号　56. 11

② 城山遺跡出土漆器の技法と保存（中里共）　城山遺跡調査報告書　56. 3

③ 合成樹脂による文化財の保存と修復（テキスト）　文化財虫害研究所　56. 9

④ 可塑性人工木材の接着性能（堀岡他共）　第19回接着研究発表会　日本接着協会　56. 6

④ レゾルシノール樹脂接着剤などによる文化財の修復（堀岡他共）　第32回日本木材学会大会　57. 3

⑤ 文化財修理における合成樹脂の利用と問題点　東文研綜合研究会　57. 1

⑤ 遺物の保存と修復　神奈川県教育庁文化課講習会　56. 9

⑤ 人工木材の強度　文化財建造物修理技術者講習会　56. 9

⑤ 合成樹脂による文化財の保存と修復　文化財虫害研究所研修会　56. 9

⑤ 石造品の保存処置　埋蔵文化財発掘技術者講習会　56. 12

青木　繁夫（第三修復技術研究室）

② 古文化財の修復と高分子（堀岡，樋口共）

日本接着協会誌17巻11号　56. 11

② 重要文化財五輪塔保存修理研究報告

重要文化財五輪塔保存修理工事報告書　56. 12

② 応急処理した彩色遺物の保存に関する研究　―彩色壁面の保存処理―

特定研究「古文化財」年次報告　57. 3

⑤ 日本における出土金属製品の保存処理　韓国文化財研究所　56. 6

⑤ 象嵌遺物の保存修復処置について

昭和56年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修会　56. 10

久野　　健（情報資料部長）

① 仏像鑑賞の基本　里文　56. 4

① 敦煌石窟の旅　六興出版　56. 7

① 渡来仏の旅　日本経済新聞社　56. 7

② 大陸への門，九州の古代平安彫刻「日本古寺美術全集」　集英社　56. 5

② 神護寺と洛西の平安仏　同　56. 7

② 中山法華経寺に伝わる文化財　中山法華経寺誌　56. 10

④ 東アジアの仏像と偏衫

第５回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」　56. 10

④ 日本の石仏　東京国立文化財研究所総合研究会　57. 3

⑤ 信濃の仏像　大和の仏像　軽井沢夏期講習会　56. 8

⑤ 飛鳥・白鳳仏の源流　美術部・情報資料部公開学術講座　57. 3

江上　　綏（主任研究官）

⑤ 西本願寺本三十六人集における宋美術からの触発

第５回文化財保存修復国際集会「東アジアにおける美術交流」　56. 10

⑤ The Structure of the Ornamentation in the Nishihonganji Version of the *Sanjūrokuninshū* ナショナル・ギャラリー・オブ・アート，コロキアム　57. 1

調査研究

⑥ Biographical Dictionary of Japanese Art（平安鎌倉やまと絵画家の項）
国際教育情報教育センター 56. 12

上野　アキ（文献資料研究室長）

② 天山南路の仏教文化『新潮古代美術館』9.「静かなるインド」 新潮社 56. 9

③ 女子箴図巻・高句麗壁画狩猟図・アスターナ宴楽図「世界の美術」10
ぎょうせい 56. 9

③ 東アジアにおける美術交流―第五回保存修復国際研究集会―（報告）
文化庁月報161 57. 2

④ 七・八世紀を中心とする婦人像の展開
第5回文化財保存修復国際研究集会「東アジアにおける美術交流」 56. 10

⑤ アスターナの美術 長野市民教養講座「正倉院の源流」 56. 9

⑤ アスターナの出土遺品について 東洋文庫秋期東洋学講座 56. 10

⑥ 「大英博物館」監修 日本テレビ 56. 5

⑥ 情報昨日今日 同朋32-8 56. 8

⑥ 西域美術―大英博物館スタインコレクション―第1巻　翻訳 講談社 57. 3

⑥ アスターナの出土遺品について・要旨 東洋文庫月報 57. 3

関口　正之（写真資料研究室長）

① 東寺と高野山（『名宝日本の美術』8） 小学館 56. 11

② 尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について 美術研究317, 319 56. 7, 57. 3

鈴木　廣之（写真資料研究室）

② 元信様花鳥図の残存と継承 「花鳥画の世界」3 学研 57. 1

② 伝又兵衛筆豊国祭礼図――風俗画における主題と変奏　上 美術研究319 57. 3

④ 岩佐又兵衛筆豊国祭礼図・風俗画における主題と変奏
美術部情報資料部研究会 56. 7

8　その他の研究活動

ほかの機関における講義など

（氏　名）	（機　関　名）	（担当科目）
伊　藤　延　男	明治大学大学院非常勤講師	文化財保存持論

川上　涇	東北大学文学部非常勤講師	東洋・日本美術史
宮　次男	京都大学文学部非常勤講師	美学美術史学
	大阪大学大学院非常勤講師	日本美術史
田村悦子	青山学院大学非常勤講師	美　術
柳澤　孝	慶応義塾大学非常勤講師	美術史特殊
	東京大学東洋文化研究所非常勤講師	中国絵画
猪川和子	帝京大学非常勤講師	日本美術史
田実栄子	お茶の水女子大学大学院非常勤講師	服飾史特論Ⅱ
	大妻女子大学非常勤講師	服飾史特論
陰里鉄郎	東京芸術大学非常勤講師	日本美術史
三隅治雄	お茶の水女子大学非常勤講師	舞踊美学特論
佐藤道子	フェリス女学院大学非常勤講師	
蒲生郷昭	青山学院大学非常勤講師	
羽田昶	武蔵野女子大学非常勤講師	
中村茂子	実践女子大学非常勤講師	芸能文化史
江本義理	東京芸術大学美術学部非常勤講師	保存科学特論
馬渕久夫	東京大学工学部非常勤講師	放射化学
鈴木友也	東京芸術大学非常勤講師	保存修復
中里寿克	武蔵野美術大学非常勤講師	
米倉迪夫	成蹊大学非常勤講師	美　術
関口正之	学習院大学非常勤講師	日本美術史
江上　綏	埼玉大学教養学部非常勤講師	日本美術史概説

Ⅳ 事　業

1 出　　版

(1) 美術研究

当所美術部・情報資料部の調査研究の成果を公表するための機関誌であって，主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し，所外研究者の寄稿を受けることもある。A 4 版，各号本文40頁（欧文抄録 2 頁を含む），原色図版 1，単色図版 8 で，昭和56年度刊行分は，次のとおりである。

美術研究　317号

＜論　説＞

散文（物語・草子類）中における和歌の書式について　田村　悦子

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について (一)　関口　正之

美術研究　318号

＜論　説＞

涅槃彫像　猪川　和子

親鸞の，特に坂東本『教行信證』の筆蹟について　上　田村　悦子

美術研究　319号

＜論　説＞

王寅について　――来舶画人研究――　鶴田　武良

伝又兵衛筆豊国祭礼図　――風俗画における主題と変奏　上　鈴木　廣之

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について (二)　関口　正之

＜研究資料＞

牛石慧筆叭々鳥図　鶴田　武良

(2) 日本美術年鑑

毎年 1 月から12月までの美術界の活動状勢を記録するもので，美術界年史，展覧会

記録，文献目録，物故者略歴等を収録し，編集は専ら第二研究室があたり，美術部，情報資料部研究員の調査執筆による。

日本美術年鑑　昭和55年版　昭57．3．31発行

(3)　芸能の科学

芸能の科学　14（芸能論考Ⅶ）

芸能部所属研究員による，伝統芸能の調査研究に関する成果公表のための機関誌である。本年度は，芸能論考集として下記の諸論文を収録し，刊行した。

来迎会と地獄芝居　――房総の念仏芸　㈡――　三隅　治雄

神田の田植と奉納芸　中村　茂子

江戸時代の音楽家たち　その経済的・社会的背景　加納　マリ

狂言の動作単元　㈠　――和泉流小舞――　羽田　昶
松本　雍

(4)　保 存 科 学

保存科学部・修復技術部が，昭和39年３月創刊以来年１回刊行している機関紙で，現在20号まで出版されている。本誌は，両部に所属する研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査，研究，受託研究報告等の論文，報告等を掲載している。本年度は，第21号を発行した。

保存科学　第21号（昭和57年３月発行）

木材年輪年代学序説……伊藤延男・三浦定俊……１

平安時代漆芸技法資料Ｘ――厳島神社古神宝類……中里　寿克……９

木彫仏像など文化財の燻蒸時間短縮法について……森　八郎・新井英夫……33

木造建造物に発生した変形菌について――明治村・北里研究所本館……新井　英夫……41

漆類似天然物の赤外吸収スペクトル……見城　敏子……47

環境システムとしての展示ケース……三浦　定俊……55

マイコンのためのTSS端末用プログラム……三浦　定俊……61

ICOM保存委員会第６回大会（オタワ）に参加して……三浦　定俊……69

事　　業

石造文化財の保存に関する国際シンポジウムに参加して……西浦　忠輝……75
昭和56年度修復処置概報……修復技術部……83

2　黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は，黒田清輝の功績を記念し併せて地方文化の振興に資するために，昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。

本年度は弘前市において開催した。

会　　期　昭和56年5月16日～昭和56年6月7日
会　　場　弘前市立博物館
主　　催　東京国立文化財研究所・弘前市・弘前市教育委員会・弘前市立博物館
開催日数　20日間
入場者数　23,067人
陳列点数　油彩60点，デッサン50点，写生帖17点，書簡3通，日記5冊
　　参考資料若干
図　　録　A4判変型112頁，原色版6頁，単色版80頁

3　公開学術講座

美術部・情報資料部（第15回）

日　　時　昭和57年3月6日（土）13：30～16：50
会　　場　日本経済新聞社小ホール（99階）
講　　演　(1)　飛鳥・白鳳仏の源流　　情報資料部長　久野　健
　　(2)　中国の山水画　　美術部長　川上　涇

芸　能　部

日　　時　昭和56年12月10日（木）18：00～20：35
会　　場　朝日ホール
テ　ー　マ　語りの技法

講　演　(1)　神語りの世界　　芸能部長　三隅　治雄

(2)　能の語りの成立　　演劇研究室　松本　雍

実演と話　語りの芸——その伝統と創造——　民俗芸能研究室長　羽田　昶

野村万之丞・観世　栄夫

4　会　　議

文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

昭和52年に始まる本集会は今年度第5回を迎えた。今回は「東アジアにおける美術交流」を主題として，美術部・情報資料部担当のもとに開催された。この主題を選んだのはこれが現在内外の学界の関心事であるとともに，日本の文化財の価値の世界的位置づけの解明に大いに役立つものと認められたことによる。

研究発表者は組織委員会の人選を経て決定され，海外9名，国内11名であった。発表は時代順に古代から近世まで6つのセクションにわけ，最終日の午後を総合討議にあてた。日程は次の通りである。

名　称　文化財の保存及び修復に関する国際研究集会—東アジアにおける美術交流

(The 5th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property—Interregional Influences in East Asian Art History—)

日　時　昭和56年10月6日～9日（4日間）

会　場　国立社会教育研修所

＜題名及び発表者＞

10月6日（火）

第Ⅰ部会　司会：秋山光和，秦　弘燮

1. The Meditative Bodhisattva Image in China, Korea and Japan.
（中国・韓国・日本における半跏思惟像）　パリ第Ⅲ大学　F．ベルチエ

2. East Asian Buddhist Sculpture and the *Henzan*.（東アジアの仏像と偏衫）
東京国立文化財研究所　久野　健

3. The Development and Eastward Diffusion of the Sui Style of Buddhist

事　業

Sculpture.（隋造像様式の成立とその東漸）　実践女子大学　松原　三郎

10月7日（水）

第Ⅱ部会　司会：松原三郎，R．スタンリー・ベーカー

1. A Survey of Votive and Ritual Textiles from the Han to T'ang Dynasty.（漢より唐に至る信仰儀礼用染織品の考察）　ギメー美術館　K．リブー
2. Spread of Painted Female Figures around the Seventh and Eighth Centuries.（7・8世紀を中心とする婦人像の展開）　東京国立文化財研究所　上野　アキ
3. The Stone Cave Temples in Silla Era.（新羅時代の石窟寺院について）　梨花女子大学校　秦　弘　燮

第Ⅲ部会　司会：J．ローゼンフィールド，安　輝　濬

1. The *Li-tai-ming-hua-chi* and th Paintings in the Shōsō-in Repository.（歴代名画記と正倉院絵画）　東京国立文化財研究所　川上　涇
2. Landscape Representations of the Nara Period and Their Relationship with T'ang Painting—with Special Attention to the Hokkedō-Kompon-Mandara.（奈良時代の山水表現と唐朝絵画—法華堂根本曼陀羅を中心に—）　学習院大学　秋山　光和
3. P'eng Lai and Jōdo—Some Paradise Compounds in China and Japan.（中国・日本の「蓬萊」と「浄土」）　ハイデルベルグ大学　L．レダローゼ
4. A Study of Painting Style of the Ryōkai Mandala at the Sai-in, Tō-ji—with Special Emphasis on Their Relationship to Late T'ang Painting.（東寺西院両界曼荼羅の様式的検討—特に晩唐絵画との関連—）　東京国立文化財研究所　柳沢　孝

10月8日（木）

第Ⅳ部会　司会：西川杏太郎，K．リブー

1. The Impact of Sung Art Seen in the Nishi-Honganji Manuscript of *Anthology of Thirty-Six Poets*.（西本願寺本三十六人集における宋美術からの触発）　東京国立文化財研究所　江上　綏
2. Shunjōbō Chōgen—Sino-Japanese Hybrid Styles of Sculpture.（俊乗坊重

源—彫刻における日中混合様式—）ハーバード大学　J．ローゼンフィールド

3. *Lotus Sutra* Frontispiece Illustrations in the Far East—Focusing on Woodblock Editions of the Sung Period.（極東の法華経見返絵—特に宋版法華経を中心にして—）　東京国立文化財研究所　宮　次男

第V部会　司会：島田修二郎，L．レダローゼ

1. Chinsō—Zen Portrait Painting in China and Japan.（頂相—中国及び日本の禅宗肖像画—）　リートベルグ美術館　H．ブリンカー

2. Iconographic Problems on the Group of Figure Compositions Titled Lü Tung-pin.（呂洞賓といわれる画像について—図様の変貌—）　東京芸術大学　海老根聡郎

3. New Initiatives in Late 15 th Century Japanese Ink Painting.（15世紀後半日本水墨画における新動向）　国立台湾大学　R．スタンリー・ベーカー

4. Chinese Influence on Korean Landscape Painting of the Yi Dynasty (1392—1910).（李朝山水画における中国影響）　弘益大学校　安　輝　濬

10月9日（金）

第VI部会　司会：北村哲郎，H．ブリンカー

1. Chinese Textiles Brought to Post-Medieval Japan and Their Influence.（中世以降近世初期の中国渡来染織品とその影響）　東京国立文化財研究所　神谷　栄子

2. A Painting Method Devised by Itō Jakuchū.（伊藤若冲独創の一描法について）　東京国立博物館　小林　忠

3. Yosa Buson and Chinese Painting.（与謝蕪村と中国絵画）　カリフォルニア大学　J．ケーヒル

総合討議　司会　米沢嘉圃，J．ケーヒル，川上　涇，久野　健

＜参加者＞

文化庁所属各機関，諸博物館・美術館，諸大学の専門研究者合計120名，うち海外からの参加者は発表者を除き30名であった。

事　　業

保存科学部・修復技術部

第11回文化財保存修復研究協議会

日　　時　昭和57年２月10日

会　　場　本研究所別館会議室

テ ー マ　「文化財の展示環境」

博物館，美術館等の展示環境における調査，環境保全の現状と，問題点及び技術に関して研究報告のほか，設計者，キューレターの立場からの展示空間，展示効果に関する報告があり，活発な討議が行われた。

例年通り，北村文化財鑑査官以下，記念物課，美術工芸課，建造物課，無形文化民俗文化課の担当調査官，東京国立博物館，国立西洋美術館，東京芸術大学，更に関係機関として奈良国立文化財研究所，元興寺文化財研究所，美術院国宝修理所，文化財建造物保存技術協会から出席を得た。

（発表課題，発表者）

1. 展示・収納環境のモニターとその応用　保存科学部物理研究室長　見城　敏子
2. 密閉された展示ケース内の湿度調整　保存科学部物理研究室　三浦　定俊
3. 古墳壁画の公開時の石室内環境保全　保存科学部主任研究官　門倉　武夫
4. 古美術品の展示と保存対策について　東京国立博物館　法隆寺宝物室長　奥村　秀雄
5. 西洋美術作品の展示と保存　国立西洋美術館主任研究官　長谷川三郎
6. 特別講演「設計上から見た展示空間」　前川国男建築設計事務所　南條　一秀

第10回文化財保存科学懇談会

日　　時　昭和57年２月24日（火）

場　　所　東京国立文化財研究所別館会議室

文化財の保存と修復に関し，保存科学部，修復技術部の調査研究が円滑に推進され，文化財保護事業に効果をもたらすことを目的として，文化庁文化財保護部文化財鑑査官，管理課，記念物課，建造物課，美術工芸課の課長及び担当技官の出席を得て，本年度の両部の特別研究，受託研究，一般研究の報告を行い，昭和56年度の両部の調査計画を説明した。

5　国際・国内交流

伊藤延男所長は，昭和56年5月23日より6月1日までイタリア国において開催された第6回イコモス総会に出席し，フィレンツェで行われた「材料」文科会の議長をつとめた。また同年8月13日より21日までの間インドネシア国に出張し，バリ島及び中部ジャワ島におけるヒンドゥー，仏教遺跡の調査を行った。

美　術　部

増田勝彦第一研究室研究員は，ユネスコ・アソシエイトエキスパートとして，イタリア国ローマにあるICCROM（文化財保存修復のための国際センター）に出張し，紙本絵画文書修復の技術研修コースを受持った。(56. 8.13～58. 8.15)

保存科学部

江本義理部長は，ユネスコ　コンサルタントとして，昭和56年11月17日より12月15日まで，インド国立文化財保存研究所の施設・設備の拡充，研究開発計画に助言を行うため，インド・ラクノウに出張した。

見城敏子物理研究室長は，文部省短期在外研究員として，昭和56年10月1日から11月30日まで，中国，武漢大学化学部等において生漆班・漆化学者，技術者との交流および出土遺物の漆膜の状態，環境調査のため，中国に出張した。

三浦定俊研究員（特理研究室）は，昭和56年9月19日より11月3日まで，第6回ICOM保存委員会大会（オタワ）と石の保存に関する国際シンポジウム（ボローニヤ）に出席および文化財の湿度・水分環境に関する研究のため，カナダ，アメリカ，フランス，イタリヤに出張した。

修復技術部

昭和55年度文部省在外研究員（長期）としてアメリカ合衆国に出張中の鶴田武良第二研究室長は，引続き同国に滞在しハーヴァード大学燕京図書館に於て近代及び現代中国絵画並びに画家資料に関する調査を行い，合わせてフォッグ美術館，フリーヤ美術館，メトロポリタン美術館，議会図書館等において修復保存施設を調査した。(55. 12. 1～56. 9.30)

事　　業

第一修復技術研究室西浦忠輝研究員は，昭和56年10月16日から11月８日迄，イタリア国，フランス国に出張し，ボローニャで開かれた石の保存に関する国際シムポジウムに出席し，研究発表を行った他，ルーブル美術館，歴史記念物研究所等を訪れ，石造文化財の保存修復に関する調査を行った。

第三修復技術研究室青木繁夫研究員は，昭和56年５月６日から７月５日まで，大韓民国政府の招請により出張し，文化財研究所において出土金属製品保存処理に関する技術交流を行った。

情報資料部

久野健情報資料部長は中華人民共和国に出張し，上海，西安，洛陽，北京等の博物館及び，龍門・鞏県両石窟を見学した（56.5.25～6.4）

江上綏主任研究官はナショナル・キャラリー・オブ・アートの視覚芸術専門研究センターの招聘研究員として，フリア美術館所蔵品を中心とする日本古代・中世絵画の研究のため渡米した（56.11.19～57.3.23）。

海外研究者の来訪

国　　名	所　　属	氏　　名
ドイツ		Dr. D. フインク
中華民国	台南市政府民政局次長	劉　阿　蘇
中　　国	中山王国文物展工作組長	劉　来　成
〃	〃　　組員	雷　従　雲
〃	〃　　組通訳	林　　台
〃	中国科学院自然科学史研究所研究副教授	潘　吉　星
インドネシア	ボロブドゥール復興事務所	Dr. A. M. サメング
〃	〃	Dr. M. イブラヒム
アメリカ	ニューヨーク大学，保存センター	M. メイガン女史
イタリア	ベニス東洋美術館長	M. ラジェリ女史
中　　国	南京博物院陳列設計員	魏　采　苹
〃	〃　副院長	赴　青　芳
〃	〃　文物修復技術員	王　金　潮
韓　　国	韓国ユネスコ国内委員会	李　貞　賢
〃	〃	崔　慶　姫

インドネシア		M. ルビス
スウェーデン	北欧博物館館長	S.K. ザクリソン
ベルギー	王立歴史美術館東洋部長	C. コジレフ女史
インドネシア	教育文化省歴史考古学遺産課長	T. アズマール
中華民国	中興工程顧問社	李　作信
〃	〃	施　教鋆
〃	〃	呉　明毅

招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員の制度が設けられ，国外２名，国内２名の研究員に研究が委嘱され，下記のように共同研究が行われた。

1) クリシュナ・リブー夫人（ギメー美術館）

共同研究課題　東洋古代染織品の研究

研究代表者　情報資料部文献資料研究室長　上野アキ

委嘱期間　56年10月３日～11月12日

2) 福田　正巳（北海道大学低温研究所助手）

共同研究課題　シングアランド法超音波速度測定による凍結融解実験における岩石劣化の判定法の開発

研究代表者　保存科学部長　江本　義理

委嘱期間　57年１月５日～２月８日

3) 鄭永　鎬博士（檀国大学校教授）

共同研究課題　日本初期仏教美術研究

研究代表者　情報資料部長　久野　健

委嘱期間　56年１月10日～２月28日

4) 田村　寛康（和歌山県立博物館学芸員）

共同研究課題　近畿地方を中心とする藤原彫刻の研究

研究代表者　情報資料部長　久野　健

委嘱期間　57年２月５日～３月９日

事　　業

職員の海外出張及び研修旅行

①渡航先　②目的　③期間　④旅費の出途

青木　繁夫

① 韓　国

② 韓国文化財研究所での金属遺物保存処理及び修復に関する実習と技術交換

③ 56.5.7～56.7.5

④ 韓国政府

伊藤　延男

① イタリア

② 第6回イコモス総会出席

③ 56.5.23～56.6.1

④ 国際交流基金

久野　　健

① 中　国

② 中国古代美術調査

③ 56.5.25～56.6.4

④ 自　費

増田　勝彦

① イタリア

② ICCROM（ローマ）における紙本文化財の修理法指導及び西洋美術品修理の研修

③ 56.8.1～57.7.31

④ ユネスコ

伊藤　延男

① インドネシア国

② インドネシア遺跡調査

③ 56.8.13～56.8.21

④ 自　費

三浦　定俊

① カナダ，アメリカ，フランス，イタリア

② 第6回国際博物館会議保存委員会大会および石の保存に関する国際シンポジウムへの出席および文化財の湿度，水分環境に関する研究

③ 56. 9. 19～56. 11. 5

④ 自　費

西浦　忠輝

① イタリア国

② 石の保存に関する国際シンポジウム出席及び石造文化財の保存，修復に関する調査

③ 56. 10. 15～56. 11. 5

④ 自　費

江本　義理

① インド

② インド国立文化財保存研究所の研究計画の策定に対して協力及び助言

③ 56. 11. 17～56. 12. 15

④ ユネスコ

江上　　綏

① アメリカ合衆国

② ナショナル・ギャラリー・オブ・アート内視覚芸術専門研究センターの招聘研究員として，フリア美術館所蔵品を中心とする日本古代・中世絵画の研究

③ 56. 11. 19～57. 3. 23

④ 視覚芸術専門研究センター

V　研究施設・設備

1　蔵　　書

美術部・情報資料部

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究書を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など和漢書（35,878），洋書（3,902）計39,780冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，部内外及び研究所外の研究者の利用に供している。

芸　能　部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書6,556冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌，丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書，技術史，又は数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書，及び化学・物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて2,335冊を所蔵している。

当所における蔵書数は次のとおりである。

区　　分	美術部 情報資料部		芸能部		保存科学部 修復技術部		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
昭和54年度	809冊	44冊	505冊	6冊	53冊	36冊	1,453冊
昭和55年度	3483〃	53〃	844〃	18〃	19〃	20〃	4,437〃
昭和56年度	529〃	42〃	280〃	4〃	52〃	25〃	932〃
総　　数	35878〃	3902〃	6520〃	36〃	1453〃	882〃	48,671〃

2 出 版 物

美 術 部

(1) 美術研究

昭和7年より同57年3月までに通算318号を刊行した。

(2) 日本美術年鑑

昭和11年創刊。毎年1冊（ただし昭和19～21，同22～26，同49～50年は各合冊）出版し，昭和57年3月までに37冊を刊行した。

(3) その他の出版物

支那古版図録	（美術研究資料第1輯）	昭和7
吉備大臣入唐絵詞	（美術研究資料第2輯）	昭和9
微宗摹張萱搗練図	（美術研究資料第3輯）	昭和10
鳳凰堂雲中供養仏	（美術研究資料第4輯）	昭和11
桃山時代金碧障壁画	（美術研究資料第5輯）	昭和12
富貴寺壁画	（美術研究資料第6輯）	昭和13
印度及南部アジア美術資料	（美術研究資料第7輯）	昭和14
光悦色紙帖	（美術研究資料第8輯）	昭和14
菱田春草	（美術研究資料第9輯）	昭和15
能恵法師絵詞	（美術研究資料第10輯）	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	（美術研究資料第11輯）	昭和16
日本美術資料	第1輯	昭和13
日本美術資料	第2輯	昭和14
日本美術資料	第3輯	昭和15
日本美術資料	第4輯	昭和16
日本美術資料	第5輯	昭和17
近代日本美術資料	第1輯	昭和23

近代日本美術資料	第２輯	昭和24
近代日本美術資料	第３輯	昭和26
墨跡資料集	第１輯	昭和24
墨跡資料集	第２輯	昭和24
墨跡資料集	第３輯	昭和26
源氏物語絵巻		昭和24
黒田清輝素描集		昭和24
栄山寺八角堂		昭和25
栄山寺八角堂の研究		昭和26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		昭和28
黒田清輝作品集		昭和29
高雄曼荼羅		昭和41
明治美術基礎資料集		昭和50
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	昭和16
東洋美術文献目録続編	昭和11年～同20年	昭和23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	昭和29
美術研究索引	第１号～第100号	昭和16
美術研究総目録	第１号～第230号	昭和16
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで（再刊）	昭和42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	昭和44

ほかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け，又は本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究	東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編	便利堂	昭和32
醍醐寺五重塔の壁画	高田　修編	吉川弘文館	昭和34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著	古川弘文館	昭和39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著	大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝	隈元謙次郎著	日本経済新聞社	昭和41

扇面法華経	秋山 光和 柳沢 孝著 鈴木 敬三	鹿島出版会	昭和47
金字宝塔曼陀羅	宮 次男著	吉川弘文館	昭和50
黒田清輝素描集	東京国立文化財研究所編	日動出版	昭和57

芸 能 部

標準日本舞踊譜			昭和35
音盤目録Ⅰ			昭和40
芸能の科学1	―芸能資料集Ⅰ 四世鶴屋南北作者年表		昭和41
芸能の科学2	―芸能資料集Ⅱ 鮫の神楽台本集成		昭和41
音盤目録Ⅱ			昭和45
東大寺修二会	観音悔過（お水取り） 東京国立文化財研究所芸能部監修	ビクターレコード	昭和46
芸能の科学3	―芸能論考Ⅰ 東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和47
芸能の科学4	―芸能資料集Ⅲ 東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和48
芸能の科学5	―芸能論考Ⅱ 東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和49
芸能の科学6	―芸能調査録Ⅰ「東大寺修二会の構成と所作」（上） 東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和50
芸能の科学7	―芸能調査録Ⅱ「東大寺修二会の構成と所作」（中） 東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和52
芸能の科学8	―芸能論考Ⅲ 東京国立文化財研究所芸能部編	キタムラ書房	昭和52
芸能の科学9	―芸能論考Ⅳ 東京国立文化財研究所芸能部編	キタムラ書房	昭和53
音盤目録Ⅲ			昭和53
芸能の科学10	―芸能論考Ⅴ		

東京国立文化財研究所芸能部編　キタムラ書房　昭和54

芸能の科学11　―芸能論考Ⅵ

東京国立文化財研究所芸能部編　キタムラ書房　昭和55

芸能の科学12　―芸能調査録Ⅲ「東大寺修二会の構成と所作」(下)

東京国立文化財研究所芸能部編　平凡社　昭和55

芸能の科学14　―芸能論考Ⅶ

東京国立文化財研究所芸能部編　キタムラ書房　昭和57

保存科学部・修復技術部

(1) 保存科学

昭和39年3月創刊になる保存科学・部修復技術部の機関誌で，年1回の刊行により昭和57年3月迄に21号を刊行した。

(2) 受託研究報告重要文化財円成寺本堂内陣彩色剝落どめ他18件　昭和35～昭和42

(3) 表具の科学（特別研究・軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究報告書）　昭和53

3 資　　料

美術部・情報資料部

実物よりの直接撮影による写真を含む写真資料の作成整理と，購入写真，複写写真による補足整備に加えて，印刷物中の図版をもおさめるという方式で，当研究所設立当初により一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全域にわたり，それぞれ絵画，書蹟，彫刻，工芸，建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ24万点，原板保有量はほぼ3分の1にあたり，別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか，拓本，作家伝記資料，落款印章資料，近代・現代作家・団体・作品資料，資料スクラップ等と，図書カード，図版カード，各種索引類など多数。

芸　能　部

レコード・録音テープ・写真(8ミリ・16ミリシネを含む)等による芸能資料を多数

そなえている。レコードには，毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか，昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは，明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので，近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は，雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので，奏演法の解析を中心とした写真・テープ，あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区　分	レコード	録音テープ	シネフィルム		写　真	ビデオテープ
			8 m/m	16 m/m		
昭和54年度までの累計	6,394枚	2,266本	198本	3本	多　数	0
昭和55年度	97〃	70〃	0	0	〃	0
昭和56年度	346〃	50〃	0	0	〃	40本
計	6,837〃	2,386〃	198〃	3〃	〃	40〃

4　機器・設備

美術部・情報資料部

機　　器

1.　X線透過撮影装置

(1)　可搬式ソフテックス装置（J型）　1式

(2)　可搬式ソフテックス装置（新J型）　1式

(3)　携帯用ソフテックス装置（E型）　1式

2.　紫外線照射装置

(1)　可搬式照射装置（フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス）　2台

(2)　携帯用紫外線検査器　1台

研究施設・設備

3. 顕微鏡装置

(1) 双眼実体顕微鏡及び写真装置　1式

(2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置（可動支持台及び携帯用スタンド）　1式

(3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置　1式

(4) 比較顕微鏡Ⅲ型　1式

4. マイクロ写真関係設備

(1) マイクロ写真撮影装置（付自動現像機，プリンター，引伸機・乾燥機等）　1式

(2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置　1式

(3) マイクロ閲読機（ルーモ社製）　3台

(4) リーダープリンター　1台

5. デアスコープ（視聴覚教育装置）　1台

6. カメラ類

(1) リンホフカルダン　1台

(2) リンホフテヒニカ　3台

(3) コメット・ストロボ CP-1200 DX　1台

(4) 工業用ファイバースコープ　1式

7. 引 伸 機

(1) オメガ（4×5）　2台

(2) フジA690　1台

(3) フジS69　1台

8. 複 写 台

(1) コピースタンド（1300）　1台

(2) スライドコピア MD 400　1台

9. 乾燥機 FC オート（全紙）　1台

10. ドライマウント シールコマーシャル 210M　1台

ドライマウント シールコマーシャル70　1台

11. マルチカードセレクター（HAC 841 S 型）　1式

12. 複写機　ハイカードL　1台

13. 製　本　機

(1) サーマバインド T220　1台

(2) ホリゾン BQ-18 L　1台

(3) 電動断裁機 PC-45　1台

14. プロジェクター　キャビン AF-2500　1台

芸　能　部

機　　器

1. 分析機器

(1) ピッチレコーダー　1台

(2) メログラフ　BT 型　1式

2. オーディオ関係機器

(1) レコードプレーヤー　8台

(2) テレビ　2台

(3) テープレコーダー　18台

(4) ビデオテープレコーダー　4台

(5) ステレオ音声調整卓　1台

(6) スピーカー　1台

(7) テープダビングシステム　1式

(8) 屋外取材用音声機器システム　1式

(9) P.C.M. 音響システム　1式

3. 撮影・影写機器

(1) 16 m/m 撮影機　1台

(2) 16 m/m 映写機　1台

(3) 8 m/m 撮影機　4台

(4) 8 m/m 映写機　2台

(5) 35 m/m 写真機　6台

(6) 35 m/m マイクロフィルム解読装置　1台

研究施設・設備

(7) 16 m/m マイクロフィルム解読・複写装置　1台

(8) 16 m/m マイクロ写真機　1台

(9) 16 m/m シネフィルム分析装置　1台

(10) リーダー・プリンター　1台

(11) ビデオカメラ　2台

4. 照明器具

(1) スタジオ用照明器具　1式

保存科学部・修復技術部

1. 機　　器

(1) サンシャインウェザーメーター（劣化促進試験機）　1台

(2) 万能試験機（島津，オートグラフ，インストロン型，10トン）　1式

(3) 回折格子光照射器　1台

(4) 紙耐揉強度試験機　1台

(5) 衝撃試験機（シャルピー，アイゾット兼用）　1台

(6) 紙耐折試験機（MIT）　1台

(7) 凍結融解試験機（コイトトロン HNL-T 特殊型）　1台

(8) シュミットハンマー（圧縮強度測定用）　1台

2. 顕微鏡装置

(1) 金属顕微鏡　1台

(2) 生物顕微鏡　1台

(3) 表面アラサ顕微鏡　1台

(4) 万能顕微鏡　1式

(5) 走査型電子顕微鏡（JSM-50 A 型）　1式

3. 分析装置

(1) ガスクロマトグラフ（ガス分析，水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分解装置付）　1式

(2) ポーターガスアナライザー（MIRAN-1 型）　1式

(3) 回折格子自記赤外分光光度計　1台

(4) 〃 赤外顕微鏡 1台

(5) 自動記録式示差熱天秤 1式

(6) 炭素・水素・窒素分析計 1式

(7) 光電分光光度計（自記） 1台

(8) 螢光X線分析装置（標準型及び非破壊用大型試料台つき） 1式

(9) 可搬式螢光線分析装置（現場可搬用） 1式

(10) X線回折装置及びデバイシェラーカメラ，ラウエカメラ（結晶同定） 1式

(11) 発光分光分析装置(MI型)（高圧整流スパーク，直流アーク） 1式

(12) カラム用循環恒温槽 1台

(13) 超音波洗浄機 1台

(14) 細管式等速電気泳動装置 1台

(15) 赤外分光光度計 1台

4. 非破壊検査装置

(1) 工業用X線発生装置（60 KVP, 4 mA） 1式

(2) 工業用X線発生装置（200 KVP, 8 mA） 1台

(3) Co-60 γ線線源（透視用 3c 及び 0.2c） 2個

(4) 赤外線TVカメラ装置 1式

(5) 超音波探傷器 UFC-201型 1台

(6) 超音波式コンクリート試験器 1台

(7) 〃 厚み測定器 1台

(8) シングアラウンド式音速測定装置 UVM-2 1式

5. 物性測定機

(1) 粒度分布測定装置 1式

(2) 熱膨張計 1台

(3) レオメーター（粘性試験用） 1式

(4) 直読式動的粘弾性測定器 1台

(5) 真空蒸着装置（表面薄膜形成用） 1台

(6) 篩振盪機（標準フルイ付） 1台

(7) 明石ロックウエル硬度計 ARK-B 1台

(8) ゴニオメーター（接触角測定機） 1台

(9) ゼーター電位測定装置 1式

(10) PH メーター 1台

(11) 透水試験機 1台

(12) 表面張力測定機 1台

(13) 万能デジタル計測システム（ユーカム８） 1式

6. 照明及び温湿度装置

(1) 自記分光放射計（光源の分光測定） 1台

(2) ライトガイドカラーメーター（色彩測定） 1台

(3) 恒温恒湿槽（0°C～40°C　20～90%） 1台

(4) 風速計（熱式）AM 01 1台

(5) サーモダックⅡ 1台

(6) 恒温恒湿槽（−30°C～80°C，5～95%） 2台

(7) SM カラーコンピューター 1台

(8) 卓上型恒温恒湿器 1台

(9) 紫外線強度計 1台

7. 殺虫殺菌装置

(1) 滅菌装置 2台

(2) 減圧殺虫装置 1台

(3) ガス滅菌装置　GS-15 特型 1台

8. 生物実験用器機

(1) 超低温槽（−50°C） 1台

(2) 冷却遠心機（−20°C～5°C） 1台

(3) ピンホールサンプラー 1台

9. 環境汚染測定装置

(1) 粉塵計（記録装置付） 1式

(2) 悪臭分析装置 1式

10. 修復処置装置

(1) 真空凍結乾燥装置 1式

(2) 減圧含浸装置　1式
(3) エヤブラッシュ装置　1式
(4) 合成樹脂圧入装置　1式
(5) 水浸木材用含浸装置　1式
(6) 熱風恒温乾燥機　1台
(7) 装潢用備品　1式
(8) 万能木工機　1台
(9) 漉　嵌　機　1台
(10) 超音波発生装置　1台
(11) 蒸　溜　器　1台

11. 情報処理装置

(1) PC-8800 システム　1式
(2) デジタルマルチメーター　1式
(3) ユニバーサルカウンター　1台
(4) AID コンバーター　1式

5 黒田記念室

黒田記念室は，本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であって，黒田清輝の油絵・素描・写生帳等を収蔵している。

創立当時主として黒田家から寄贈されたものは，油絵125点，素描170点，写生帳等であるが，その後黒田照子夫人，樺山愛輔，田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは,「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし，観覧を停止する日は左の通りとする。

祝　日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

研究施設・設備

本研究所において必要があるときは，前条の日時を随時変更することがある。ただし，この場合は予め掲示する。

昭和52年度より，黒田清輝作品の地方巡回展を行い，本年度は弘前市立博物館で開催した。

6 閲 覧 室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は，約500名である。

東京国立文化財研究所要覧（昭和56年度）

昭和58年3月5日発行

発行所　東京国立文化財研究所

〒110　東京都台東区上野公園13-27
電話（823)2241(代)